



MAKE NEW STANDARDS.

東海国立
大学機構



岐阜大学

第10号

岐阜大学

国際交流年報

2024



Gifu University Organization for Promotion of Globalization GU-GLOCAL

岐阜大学 グローカル推進機構

Table of contents

目次

学長メッセージ

岐阜大学国際交流年報 第10号の発行にあたって

I	国際化推進体制	5
1.	岐阜大学の国際化推進体制	5
	各部門の活動報告	6
	学内の国際化をサポートする体制（日本語・日本文化教育体制／保健管理体制）...	10
2.	海外大学・機関等との学術・学生交流協定	13
	本年度に新規締結した協定大学等	13
	大学間学術交流協定締結大学・機関マップ	14
	部局間学術交流協定締結大学・機関マップ	16
	外国人留学生在籍数	18
	岐阜大学学生の海外派遣実績	19
	 トビタテ！留学 JAPAN とは？	22
	岐阜大学教職員派遣実績	23
	外国人研究者・来訪者受入れ実績	23
	国際協力活動（JICA 事業）	24
	短期研修プログラム（サマースクール／Collaborative Video Making Program／ Winter School／Spring School Program）	25
3.	国際交流活動	28
	国際協働教育・地域国際化関連	28
	留学推進・国際企画関連	30
	留学生就職促進プログラム関連	32
	日本語・日本文化教育センター関連	33
	学内の国際化の取組	34
	大学の世界展開力強化事業	36
	地域国際化の取組	37
	全国大学 JDP 協議会	37
	留学生就職促進プログラム	38
	岐阜地域留学生交流推進協議会	39
II	各学部・研究科等の主な国際交流活動	40
1.	教育学部	40
2.	地域科学部	41
3.	医学部・医学系研究科	42
4.	工学部	45

5. 応用生物科学部	46
6. 社会システム経営学環	47
7. 連合農学研究科	48
8. 保健管理センター	49

III 大学の国際化と学生支援 50

アドバンスド・グローバル・プログラム（AGP）について	久米 徹二・柳瀬 笑子	50
地域科学部国際交流コースについて	和佐田 裕昭	52

IV 資料 54

1. 令和6年度グローバル推進機構名簿	54
2. 協定一覧	56
3. 本学の国際関連活動	59
学長表敬訪問（来訪・往訪）	59
令和6年度国際関連事業一覧（全体）	60
4. 大学間学術交流協定先との交流状況	62
5. 海外オフィス・研究施設	64
6. 国際共同研究等の採択実績	64
（公財）田口福寿会	64
7. 留学生の地域貢献	65
8. 令和6年度における各種広報資材	66

学長メッセージ

ソーシャルインパクトの創出に向けて

岐阜大学は名古屋大学と法人統合し、国立大学法人東海国立大学機構として、将来の国立大学の新たなモデルとして発展を続けています。「Make New Standards for the Public」というミッションを共有し、ビジョンを「地域共創、特色ある研究、イノベーション、教育を戦略的に推進し、地域と人類の課題解決に貢献する『地域活性化の中核拠点』となる」と定めました。

1949年の創立以来、受け継がれてきた岐阜大学のモットーは「人が育つ場所」、育成の目標は「学び、究め、貢献する」人材です。Society 5.0の時代を担う人材育成として、国際通用性のある質の高い教育を実践します。それにより「国際化を通じてより一層の地域貢献」を行う地域中核大学として、国内外で活躍する次世代を担うリーダーとなり得る人材を育成することを目指します。とくに国際化の進捗状況を確認する基礎資料が岐阜大学国際交流年報であり、2015年度版から刊行が始まりました。日本国内の一定地域と海外の一定地域とが教育、研究、あるいは社会・経済活動についてマッチする課題を共有し、また認識し、それを解決することによって得られる成果が双方の地域振興に結実するという実践的な国際化が目標です。

2022年からの第4期中期目標・中期計画が始まり、岐阜大学においては、国際展開が加速しています。「大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～」に採択され、インド工科大学グワハティ校、岐阜・東海地域及び北東インド地域の産官学と連携した各種取り組みを行っています。本学とインド工科大学グワハティ校の連携が首相官邸の海外向けPR動画に取り上げられました。大変名誉な事です。JDP（Joint Degree Program）を中心とした人材育成を主導しており、岐阜大学は全国大学JD協議会の会長を担当することとなりました。

大学間協定は、20カ国51大学、部局間では26カ国60大学、さらに個人レベルでの共同研究は、極めて多く行われています。2024年度の交流として、駐日ジョージア特命全権大使（ティムラズ・レジャバ氏）が本学を訪問（2024.6）されました。また、7月にはラバト国際大学ヌレディン・ムアディブ学長らが本学を訪問され、大学間協定の締結を行いました（2024.7）。また、タイのシーナカリンウィロート大学学長等が本学を訪問（2024.7）され意見交換を行い、3月に再度訪問された際には、大学間協定を締結しました。2024年度にはサマルカンド国立医科大学（2024.7）、リール大学（2024.9）、ヴィータウタス・マグナス大学（2024.9）を訪問致しました。2025年度は、マレーシア国民大学、アンダラス大学などを訪問予定です。

さて我が国は、2023年4月に教育未来創造会議第二次提言として、「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ（J-MIRAI）」をとりまとめ、コロナ後の新たな留学生派遣・受け入れ方策や、留学生の卒業後の活躍に向けた環境整備、教育の国際化の推進などが提言されました。すなわち、世界最先端の分野で活躍する高度人材から地域の成長・発展を支える人材まで厚みのある多様な人材を育成・確保し、多様性と包摂性のある持続可能な社会を構築する。そして、我が国の更なる成長を促し、国際競争力を高めるとともに、世界の平和と安定に貢献していくことが盛り込まれました。さらにこれまでの留学生交流については、量を重視するのみならず、質の向上を図ることも重要視されます。いずれにしても、より強力に高等教育段階の人的交流を促進し、世界に伍する水準への改革を進め、海外に留学した日本人学生の就職の円滑化や日本で活躍を希望する外国人留学生の国内への定着が促進されます。これらの指針に沿った形で、岐阜大学も東海地区の大学などの連携を深め協働し、国際展開を推進します。



岐阜大学長 吉田和弘

2025年5月20日 岐阜大学長 吉田 和弘

岐阜大学国際交流年報 第10号の発行にあたって

岐阜大学の国際交流に関する年報「岐阜大学国際交流年報」も第10号刊行を迎えました。この年報は、「大学の国際化とその地域還元」とする岐阜大学の理念の下で、グローバル推進機構（Gifu University Organization for Promotion of Glocalization: GU-GLOCAL）が中心となり、実施する令和6年度の国際活動（教育、研究、地域貢献）について、岐阜大学国際交流ニュースレターやグローバル推進機構の各部門及び、学内部局が発信した記事などの掲載を中心にまとめています。



グローバル推進機構長
小山 博之

令和6年は、令和4年度に採択された大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～」の活動を中心に、渡航を伴う様々な事業に取り組んだ年といえます。大学の世界展開力強化事業は博士課程2専攻、修士課程1専攻を実施するインド工科大学グワハティ校と連携して、新しい国際協働教育を構築する野心的なものとなっています。この活動では、短期派遣（国際研修）プログラムであるウィンタースクール（短期招聘）、スプリングスクール（短期派遣）プログラムを実施し、さらにジョイント・ディグリープログラム（JDP）を中軸として産官学金が議論を深める岐阜JDシンポジウム及びグワハティJDシンポジウムを実施しました。JDP自体は入学定員が少ないものの、関連した学生交流プログラムを組み合わせることで、全学的な波及や社会への波及が図ることが可能となっています。一方、医療、看護分野や、COIL型の教育を実施することとなっている南フロリダ大学と医学部を中心とする交流の深化や、リール大学やヴィータウタス・マグヌス大学とJDPを目指した連合農学研究科の取り組みなど、国際化の新しい芽も育まれた年でした。一方、地域の国際化の推進に関する取り組みでも前進が認められた年となりました。例えば、近隣の高校での本学留学生と高校生の交流、インドを中心とする海外地域における民間企業の活動支援などがその例です。このような多面的な取り組みが、本学と地域社会に広がることが望まれます。

末筆になりますが、この原稿を書いている時点で、留学ビザの停止や発給に係る面接の制度変更など、最も多くの日本人学生が学ぶ米国の留学事情が大きく変化しました。しかしながら、一国のみでは解決できない、「地球規模の課題」が問題となる中で、学生の国際的な環境での学びや交流の機会を維持することは引き続き重要だと考えます。様々な面で、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

2025年5月27日 グローバル推進機構長 小山博之

I. 国際化推進体制

1. 岐阜大学の国際化推進体制

本学はジョイント・ディグリープログラム（JDP）を基軸としたグローバルリーダーの育成と留学生ネットワークの構築により、地域に根ざした国際化を実現することを「岐阜大学のミッション・ビジョンと戦略」に掲げている。グローバル推進機構では、教員と事務職員が協働し、地域に根ざした国際化と成果の地域還元を推進するため、グローバル推進機構長のもとに、国際協働教育推進部門、地域国際化推進部門、留学推進部門及び国際企画部門の4部門を設置し、全学的な組織として各部局との連携により本学のさらなる国際化を目指している。



グローバル推進機構ホームページ



THE 世界大学ランキング日本版掲載：冊子



YouTube チャンネル

各部門の活動報告

令和6年度国際協働教育推進部門活動報告

部門長 柳瀬 笑子
(応用生物科学部 教授)

1. 活動内容及び成果

国際協働教育推進部門では、グローバルな視点を持つ学生を育成するための国際協働教育の推進と、各部署が行うジョイント・ディグリー（JD）専攻の運営に必要な側面支援をミッションとしており、教員・学生の相互派遣、合同シンポジウム、広報などを実施している。

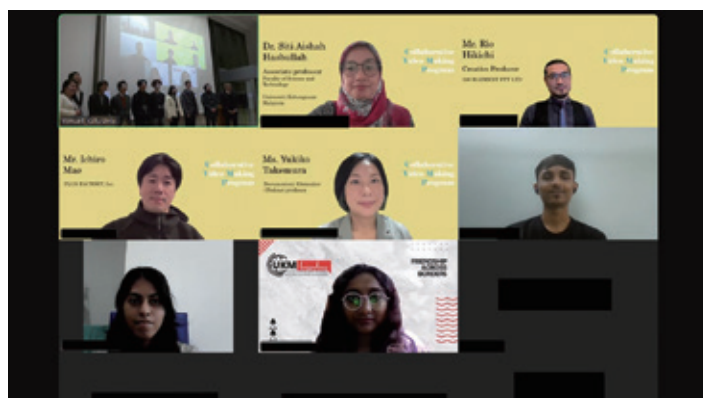
令和6年度は、インド工科大学グワハティ校（IITG）から修士課程5名及び博士課程3名、並びにマレーシア国民大学（UKM）から博士課程2名の、合計10名のJD学生が来日した。岐阜大学（本学）側からは、修士課程の日本人学生3名及び博士課程1名がIITGへ渡航した。今年度は、IITG側で1名、UKM側で1名が修了したほか、3月には本専攻博士課程の初めての日本人修了生として、連合農学研究科国際連携食品科学技術専攻の多賀勇亮さんが学位を取得し一般企業へ就職した。今後は、本専攻での経験を活かして国際的に活躍されることが期待される。

7月から約4か月間にわたり、Collaborative Video Making Program（CVMP）を実施した。今年度は本学7名、IITG4名およびUKM5名の学生が4グループに分かれ「SDGsを考える」をテーマに動画の共同制作を行った。12月12日には、Final CompetitionをZoom WebinarとOKB岐阜大学プラザ1階プレゼンテーションエリアのハイブリッド開催にて行い、今年度はグループ1の作品「Beat the Heat」が最優秀作品に決定した。なお、来年度より公益財団法人田口福寿会からのご支援が決定しており、今後、本プログラムの一層の充実と発展が期待される。

12月にGILP Symposium 2024 Winterをオンライン開催した。本シンポジウムは、IITG出身で本学工学部のHimanshu Shekhar Jha先生をアドバイザーに迎え、JD博士課程学生を中心としたグローバルエキスパートプログラム学生が主導して企画した。シンポジウムでは、招待講演や学生による研究発表が行われ、活発な議論と有意義な交流の場となった。

2. 課題及び次年度の取組方針

CVMPやシンポジウムなど、これまで当部門で継続的に実施してきたプログラムについて、内容の精査や実施体制の見直しを行い、より効果的な国際交流を推進する。また、学生が国際的な視野を広げるための実践の機会を充実させる取組を強化する。



令和6年度地域国際化推進部門活動報告

部門長 海老原 章郎
(応用生物科学部 教授)

1. 活動内容及び成果

地域国際化推進部門が中心となって実施した活動を以下に挙げる。

(ア) グローカル化のためのSDGs勉強会

本勉強会は通年で6回程度の話題提供を行うウェビナーで、今年度で5回目を迎えた。学内外の専門家を講師として招き、バイオエコノミーへの転換や脱炭素化社会の実現に貢献する技術を中心に構成した。例えば、「『脱炭素』を本気で考える～人類に欠かせない炭素で構成された材料達～」(講師 岐阜大学工学部 入澤寿平准教授)、「食料安全保障と環境負荷問題解決への貢献 肥育期間の短縮による温室効果ガスの低減を目指す畜産DXの取り組み」(講師 一般財団法人ファインセラミックスセンター木村 禎一氏)など、グローカル化におけるSDGsを支える基盤技術に関する理解を深めることができた。さらに、東海農政局局長 秋葉 一彦氏からは持続可能な食料システムの構築に向けた「みどりの食料システム戦略」、ミラインディア株式会社の望月 奈津子氏からは「インドの教育NPOが導く社会インパクトと企業メリット」など、SDGs実現につながる政策および社会活動について認識を新たにした。

(イ) 岐阜ジョイント・ディグリー(JD)シンポジウム(特に産官学金連携セッション)

12月6日に開催された本シンポジウムでは、東海国立大学機構主催のメインシンポジウムに引き続き、岐阜大学主催の産官学金連携セッションを実施した。同セッションは「グローカル化による地球課題解決への挑戦」と題し対面・オンライン参加を合わせ95名が参加した。インドにおけるグローカル化活動に貢献のあった9企業に対する感謝状贈呈式の後、竹資源利活用に関する具体的な取り組みや今後の展開についてパネルディスカッションを行った。同日並行開催した東海地域を中心とした企業・団体によるブース展示には22社が参加し、学生ならびにシンポジウム参加者が東海地域の企業・団体を知る場となった。

(ウ) インド・ジョイント・ディグリーシンポジウム

2025年3月3日～3月4日、インド工科大学グワハティ校(IITG)においてインドJDシンポジウム「JDPプラットフォームによる日本-北東インド産学技術協力シンポジウム2025」を共催した。シンポジウムには2日間でオンラインを含む延べ176名が参加した(本学教員12名、学生10名が現地参加)。吉田 和弘 岐阜大学学長並びにSibi George 在日本インド大使からの祝辞がビデオメッセージとして上映され、その後、渡辺 真人 在日本インド大使館 一等書記官による基調講演が行われた。企業連携セッションでは、日本の政府機関(JETRO(日本貿易振興機構)、JICA(国際協力機構))ならびにシンポジウム参加の日印企業(日本からは6企業)の活動紹介がなされたが、シンポジウム時のみならず定期的にオンライン情報交換を求める提案があった。5日には近郊のインド企業ならびに研究所を訪問し、北東インドにおける産業振興の現状について理解を深めた。

(エ) 愛岐留学生就職促進コンソーシアム事業における岐阜県内ワークショップ

岐阜県、岐阜県経営者協会、JETRO 岐阜と本学が共催する本ワークショップを10月30日に対面方式にて開催した。「東海圏における高度外国人材の活用に向けて：定着促進の視点から」と題した講演の部では、株式会社キョウワの代表取締役社長 白田 龍司氏ならびに株式会社テクノプレニードヒダで活躍中のクンナラッタラ スワビス氏から、事業主と外国人労働者それぞれの立場から講演を行って頂いた。続く企業ブース展示(岐阜県の11社)では、留学生(6カ国)14名が参加し、就職マッチングを含めた留学生・日本企業間交流を行った。

(オ) 地域国際化を推進する勉強会の開催

4月4日には「竹資源利用勉強会」、5月9日には中部経済産業局及び中部経済連合会との共催「Meet up Chubu vol.39 CN(バイオマス・竹資源活用)」、8月28日には笹川平和財団主催・岐阜大学共催で「北東インドの多様性と平和を考えるーRemembering in Peaceー」を開催した。

2. 課題及び次年度の取組方針

令和7年度も上記(ア)～(エ)の活動を実施・連動させ、グローカルの視点から地球課題を解決する人材育成とグローカル産官学金連携の両面から地域国際化を推進する。

令和6年度留学推進部門活動報告

部門長 嶋 睦宏
(工学部 教授)

1. 活動内容及び成果

国際交流のさらなる活性化を目ざし、令和6年度は留学推進部門における活動においても現地への派遣および本学での受入によるプログラムを実施した。具体的には、英語研修プログラムにおいては8月～9月に夏季アルバータ大学 ESL プログラム (Summer Alberta ESL)、グリフィス大学 ESL プログラム (Summer Griffith ESL)、及びカリフォルニア大学デービス校 EST プログラム (Summer UC Davis EST)、2025年2月～2025年3月に春季アルバータ大学 EST プログラム (Spring Alberta EST)、アルバータ大学 EFN プログラム (Spring Alberta EFN)、アルバータ大学 ESL プログラム (Spring Alberta ESL) を実施し、Summer Alberta ESL 21名、Summer Griffith ESL 28名、Summer UC Davis EST 3名、Spring Alberta EST 6名、Spring Alberta EFN 2名、Spring Alberta ESL 3名の計63名が参加した。Spring Alberta ESL では、アルバータ大学と連携し、教育分野に興味がある学生向けに現地での教育分野での交流を一部組み込んだセミカスタマイズプログラムを実施した。Spring Alberta EST では、昨年度と同様、愛媛大学や静岡大学等と連携し、参加者募集や渡航時におけるグループ対応、オンラインによる事前研修など、学生にとって有益なプログラム提供が実現できたと考える。プログラム参加者は全員無事元気に帰国し、その多くからは貴重な学びと経験を得ることができたとの声が聞かれた。

岐阜大学サマースクール受入プログラムでは、ノーザンケンタッキー大学 (米国)、広西大学 (中国) 及びソウル科学技術大学校 (韓国) から計9名の参加者があり、岐阜大学で実施した。日本語授業のほか、本学学生との交流活動、郡上でのホームステイ、美濃での和紙づくり体験、関での日本刀鍛冶見学なども行い、参加者からは日本の伝統文化および現代文化への理解が深まったなどの感想も聞かれた。

本学に在学する外国人留学生の生活支援についても、特に国際交流会館などの住環境をはじめとする修学環境のさらなる整備などについて活発な意見交換を行った。また、「危機管理基本マニュアル (学生関係) 海外渡航編」や「留学ガイドブック」の更新についても、部門活動の一環として実施し、本学の国際化推進に着実に貢献した。

2. 課題及び次年度の取組方針

課題として、昨今の円安傾向と世界的なインフレが進行する中、学生の交流をさらに活性化すべく、協定大学との連携をさらに強化し、次年度も引き続き派遣と受入の両プログラムの更なる充実を図り、実質的な人的交流を進めたい。具体的には、より多様性が尊重される国際社会へ向けて次世代の人材育成が大学においても重要な使命となるなか、国際語としての英語の語学学習にとどまらず、広く異文化への理解にも重点を置いたプログラムの提供へ向けてさらに努めたい。また外国人留学生の生活支援やプログラム改善についても、更なる環境整備に努める。



令和6年度国際企画部門活動報告

部門長 古田 知美
(グローバル推進機構国際企画調整役)

1. 活動内容及び成果

本部門は、学術交流・協定支援、国際交流に関する IR、国際広報及びキャンパスの国際化支援を担当した。令和6年度は、10名の教員と5名の事務職員から構成され、部門長は事務職員である国際企画調整役、副部門長は松井 真弓助教、部門員には担当事項（年報、学術交流・協定、IR、広報誌、HP 及びキャンパス国際化）を決めて対応願うこととした。基本的には部門長、副部門長、国際総務室及び留学支援室で構成する部門 WG（月1回開催）を中心に活動し、必要に応じて国際企画部門会議等により担当部門員や全部門員への意見照会を行った。

部門 WG で1年間定型的に取り上げた事項は、①学術交流・協定支援、②国際交流に関する IR（国際交流年報を含む）、③国際広報（ホームページ、NEWS LETTER、チラシ）、④卒業した留学生のネットワークづくり、⑤キャンパスの国際化支援（事務職員の英語力強化を含む）、⑥国際企画部門イベント及び⑦年度計画への対応である。

①については、毎月、学術交流協定の更新状況を確認し、協定大学の担当者と連絡を取りながら、協定書の更新作業を行った。また、協定校等7大学の学長表敬訪問及び駐日ジョージア大使、駐日インド大使の学長表敬訪問、駐日リトアニア大使の特別講演実施、在名古屋米国領事館首席領事の学長表敬訪問・学生交流を受け入れた。②については、国際交流年報及び国際 IR データブックを刊行し、継続的なデータ収集とその活用を行った。③については、NEWS LETTER の発行、ウィンタースクール報告書の作成、インド工科大学ハイデラバード校（IITH）で行われた日本留学フェアにおいて岐阜大学を PR することを目的にチラシを作成した。④については、NEWS LETTER のデータを卒業生に送付したほか、本学卒業生が事務局を務める上海事務所による広報活動等への支援を行った。⑤については、事務系職員を対象に大学間学術交流協定大学であるカナダ・アルバータ大学に約2週間派遣し語学研修及び国際業務に係るインターンシップを行う職員海外実務研修を5年ぶりに実施し、1名の職員を派遣した。⑥については、7月に GU-GLOCAL シンポジウム2024『世界に翼を広げたら』を開催した。ポッドキャストプロデューサー 竹村 由紀子氏の司会で、吉田 和弘 学長、脳科学者で本学客員教授の茂木 健一郎氏、企業のインド進出支援等を行う繁田 奈歩氏、クリエイティブディレクターのレイ イナモト氏を招きディスカッション等を行い、大学生・高校生など約450名が会場およびオンラインで参加した。

2. 課題及び次年度の取組方針

国際企画部門では、引き続き、文化交流イベントの開催、学術交流協定大学との連携強化、海外からの訪問者への機能的な対応、教職員研修プログラムの実施及び留学生ネットワークの構築などを検討していきたい。

学内の国際化をサポートする体制

【日本語・日本文化教育体制】（日本語・日本文化教育センター）

岐阜大学における日本語・日本文化教育は日本語・日本文化教育センター（以下「日文センター」という。）が担っている。日文センターでは、対象学生によって異なる様々なコースやプログラムを提供している（日文センターの活動等については、センターのホームページを参照ください）。



（１）日本語研修コース

本学に在籍する大学院生、研究生及び交換留学生を対象とした１学期間のコースで、前期・後期に開講される。１週間の授業数が異なる「集中コース」と「一般コース」がある。前者は、集中的に日本語を学び、日本語の習得・向上を目指す（週10～11コマ必修）。後者は、専門の研究が中心であるため、まとまった日本語学習の時間が取れない学生向けの、授業数を選択できるコースとなっている（週1～10コマ選択）。集中コースは初級（A）、初中級（B）、中級（C）の３レベルのクラス、一般コースは初級前半（A1）、初級後半（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級（D）の５レベルのクラスに分かれている。学期が始まる前に学内公募が行われ、指導教員の申請によってコースが決定し、プレイスメントテストの結果によって当人のレベルにあったクラスが決まる。

（２）日本語・日本文化研修コース

自国の大学で日本語・日本文化を専攻する文部科学省奨学金留学生と交換留学生を対象とした、毎年10月に始まる約１年間のコースである。日本語授業や全学対象の授業を受けることにより日本語能力を向上させ、日文センターより提供される多彩な文化科目の受講、地域への見学旅行等により、日本文化・社会について深い見識を養うことができる。コースの終わりには、担当教員の指導のもと、日本語・日本文化に関わる修了論文を完成させ、研究発表を行う。

（３）日本社会文化プログラム

日文センターに所属する交流協定大学の交換留学生（日本語・日本文化学習を希望する、日本語初級～中級レベルの学生）を対象としたプログラムである。「異文化理解」と「日本文化理解」の二つのステップで、日本の社会や文化に関する知識を身につけることを目的に、半年ないしは１年間の研修期間で実施する。日本語を学ぶだけでなく、日本文化の授業や、能楽や郡上踊りなどを実際に体験する「日本文化ワークショップ」にも参加し、日本文化を実践的に学ぶ。

（４）全学共通教育（日本語・日本事情クラス、人文科学科目）

各学部 に在籍する留学生と交換留学生を対象とした、上級レベルの日本語と日本事情に関する科目（４科目）を開講している。また、人文科学科目（５科目）も開講しており、その中には留学生と日本人学生の合同授業もある。

（５）交流ラウンジ

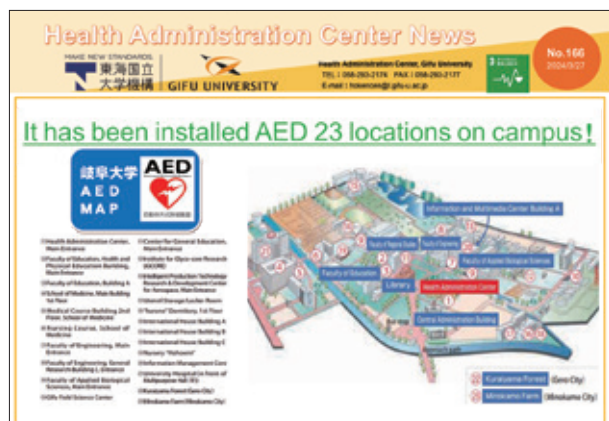
授業以外での日本語・日本文化教育の場として、日文センター内には「交流ラウンジ」が設置されている。外国人留学生と日本人学生との交流、日本人学生チューター（ラウンジチューター）による勉学・生活支援及びパソコンの利用等、多様な活動ができ、留学生と日本人学生双方にとって有意義な場所となっている。また、ラウンジチューターが中心となって、夏は七夕まつり、冬はお正月イベントを開催するなど、学生主体の日本文化学習の場所にもなっている。

【保健管理体制】（保健管理センター）

保健管理センターでは、外国人留学生及び研究者の健康管理に注力している。また、海外へ渡航する学生及び教職員に対しても準備も含めて種々の健康支援を提供している。

（１）外国人留学生・研究者に向けた英語での情報提供(保健管理センターニュース等による)をホームページなどで公開すると同時に、タイムリーな情報は適宜メール(英文)で配信している。

救命救急（AED）の案内



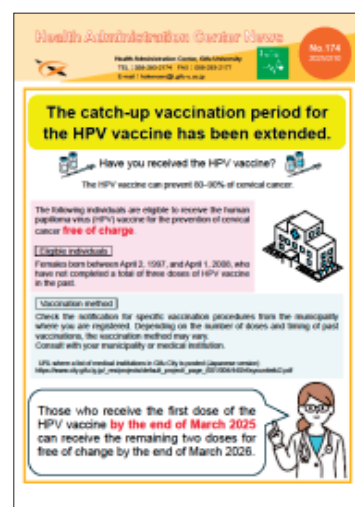
センターの利用案内（英語版）



保健管理センターニュース英語版

《令和 6 年度発行実績》

No.	発行日	タイトル
167	2024. 4. 8	Notification of Special Health Checkup in 2024
—	2024. 5. 14	Communication on Campus (Compus)
170	2024. 7. 24	COVID-19 are on the rise again on campus!
170	2024. 7. 24	Beware of bees!
168	2024. 7. 29	Be cautious of heatstroke during sports!
—	2024. 8. 9	Notice of Change in Reception Hours
—	2024.10. 4	Notice of Website Renewal
—	2024.10. 4	Compus -Communication Skills Enhancement Program-
—	2024.10. 8	Announcement for Yoga Classes in October
171	2024.10.11	Notification of Special Health Checkup in 2024
—	2024.10.23	[November Exclusive] Point Card Campaign
172	2024.10.31	To students and faculty considering overseas travel
—	2024.11. 6	Announcement for Yoga Class in November
—	2024.11. 7	Compus -Communication Skills Enhancement Program-
173	2024.11.26	Prepare for flu season
—	2024.12. 3	Announcement for Yoga Class in December
—	2024.12. 6	Compus -Communication Skills Enhancement Program-
—	2024.12.16	Notification of Annual Health Checkup in 2025
—	2024.12.17	Nutrition advice service is available for new 2nd year students in annual health checkup
—	2025. 1. 10	Collaboration between the American Football Team and the Health Administration Center "Must-See! Nutrition Seminar for Building a Strong Body"
—	2025. 1. 15	Yoga Class in January
—	2025. 1. 21	Compus -Communication Skills Enhancement Program-
—	2025. 2. 5	Announcement for Yoga Class in February
—	2025. 2. 5	The American Football Club and the Health Administration Center Collaboratively Hosted a Special Seminar: "Essential Nutrition for Building a Strong Body!"
174	2025. 2. 10	Extension of the Free Cervical Cancer Vaccination Period
—	2025. 3. 3	Yoga Class in March
175	2025. 3. 7	Do you always brush your teeth properly?





(2) 外国人留学生・研究者来日時に質の高い健康診断を実施し、その受診を徹底している

外国人留学生・研究者には、来日後速やかに、本学新入生と同じ質の高い健康診断とその結果に基づく健康管理指導を提供している。特に、全員に麻疹、風疹、流行性耳下腺炎及び水痘の抗体検査を実施し、抵抗力（抗体価）が不十分な者には追加予防接種を積極的に勧奨している。結核蔓延国から来日する者もいるので、来日直後の胸部 X 線写真撮影は義務づけるとともに、所見があれば速やかに精密検査の手配を支援している。生来初めて健康診断を受けるという留学生も少なくないので、健康診断の目的や結果について英語で丁寧に説明している。

(3) 「Health Management on Campus」の提供

外国人留学生・研究者全員に英語の健康啓発本を来日直後に無料で提供し、自己健康管理、健康意識の向上につなげている。外国人留学生に対しては同伴家族の案件も含め幅広い健康相談に対応している。

(4) 海外渡航に向けた「健康の手引き」を用いた渡航時の健康管理指導

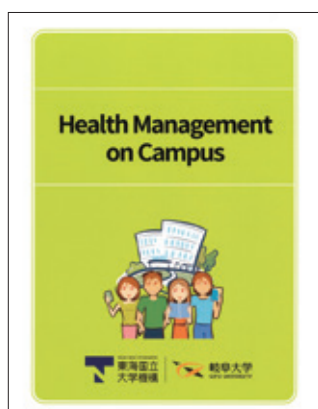
海外へ渡航する学生及び教職員に向けて、海外渡航時に健康面で注意すべき事項をわかりやすくまとめたパンフレットを提供し、予防接種準備を含め渡航先に応じた健康管理について個別に面談指導している。

(海外留学健康の手引き 2025年 5 月 第五版：<https://hoken.gifu-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2025/03/tebiki2025.pdf>)



(5) 外国人受け入れ教職員向け冊子「International Students(海外からの留学生)への健康管理の手引き」の提供(2020年9月第一版:https://hoken.gifu-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2025/05/Guide_for_International_Students2020.pdf)

教職員の資質向上のために、留学生の健康管理支援に必要な知識とスキル情報について詳述された冊子をホームページで公開すると同時に、適宜、学内教職員に提供し、留学生の支援環境向上に役立てている。



2. 海外大学・機関等との学術・学生交流協定

本学では、組織的・計画的な研究者・学生の交流及び教育研究に関する情報交換等を推進するため、積極的に大学間学術交流協定を締結している。2025年3月31日現在、20ヵ国51大学との大学間学術交流協定を締結しているほか、各部局においても様々な学術交流協定を締結している。

一覧はⅣ. 資料に掲載し、本年度に新規締結した協定大学等の詳細を以下に記載する。

本年度に新規締結した協定大学等

大学間

令和6年度に新規締結した学術交流協定大学等

① ラバト国際大学（モロッコ）

概要	2023年12月に本学吉田学長と関係教職員がUIRを訪問した際に、2024年夏にUIRが本学を訪問する時には、大学間交流協定を締結できるように準備を進めることを両大学が同意し締結に至った。		
目的	両大学ともに特にエネルギー工学や経営学に関する教育研究基盤を有しており、今後、これらの分野を中心として研究面及び教育面の両面から活発な交流が予定されている。また、同大学では付属病院を新設予定であり、将来的に医学分野での交流も期待されている。		
協定発効日	2024.7.8	協定期間	5年間
年間交換留学可能学生数	2		

② シーナカリンウィロート大学（タイ）

概要	これまでシーナカリンウィロート大学（SWU）の教員ならびに博士課程研究者や学部学生が、特別支援教育と障がい児・者の就労の可能性を研究調査するために、本学教育学部ならびに応用生物科学部附属岐大農場を訪問し、また、これら組織の研究者もSWUを訪問し相互に交流を図っている。		
目的	特に多様な人材の活躍する社会を実現するために、SWUと本学の交流の将来性として、教育学部・応用生物科学部・自然科学技術研究科を中心として学術交流を発展させる必要がある。また、SWUと本学の間には、類似する学問領域の学部や研究組織が多数あり、他学部間での交流実現の可能性もある。		
協定発効日	2025.3.27	協定期間	5年間
年間交換留学可能学生数	2		

令和6年度に学術交流協定の更新を完了した大学

	協定大学名	国・地域	最新発効日	有効期間
1	アンダラス大学	インドネシア	2024年6月19日	5年間
2	ダッカ大学	バングラデシュ	2024年6月22日	5年間
3	キングモンクット工科大学トンブリ校	タイ	2024年12月30日	5年間
4	高麗大学	韓国	2025年1月15日	5年間
5	ベンハー大学	エジプト	2025年3月18日	5年間
6	華僑大学	中国	2025年3月29日	5年間
7	カウナス工科大学	リトアニア	2025年4月1日	5年間

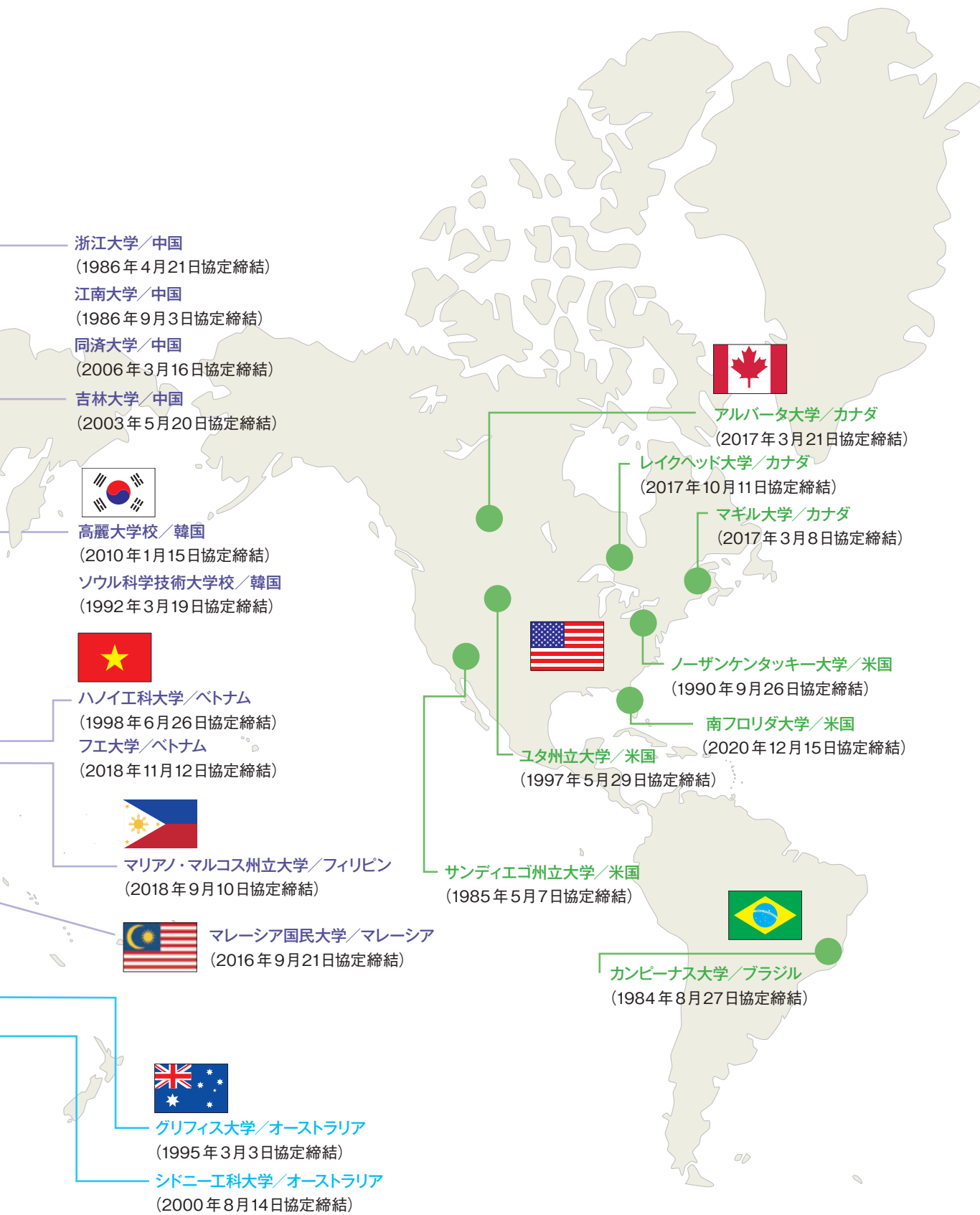
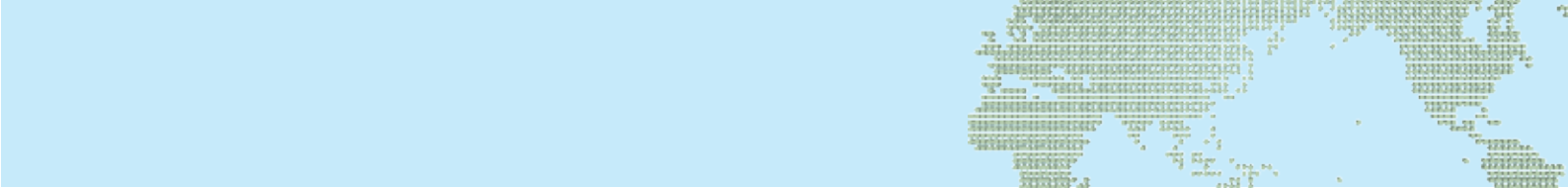
部局間

令和6年度に新規に締結した学術交流協定大学等

部局	締結先	国・地域	締結日
連合農学研究科	ラジャスタン大学 生命科学研究科	インド	2024.6.27
連合創薬医療情報研究科	トリノ大学	イタリア	2025.3.18

大学間学術交流協定締結大学・機関マップ (2025年3月31日現在 20ヵ国51大学)





部局間学術交流協定締結大学・機関マップ (2025年3月31日現在 26ヵ国1地域65学部)



表示アイコン	協定部局	表示アイコン	協定部局
	教育学部		連合創薬医療情報研究科
	地域科学部		保健管理センター
	医学部		インフラマネジメント技術研究センター
	工学部		複合材料研究センター
	応用生物科学部		地域連携スマート金型技術研究センター
	連合農学研究科		科学研究基盤センター
	連合獣医学研究科		地方創生エネルギーシステム研究センター
	共同獣医学研究科		



 山西師範大学／中国
 浙江大学 医学院／中国
 南京師範大学 エネルギー機械工学院／中国
 中国科学院水利部 水土保持研究所／中国
 中国水利水电科学研究院 岩土工程研究所／中国



 忠北大学校 医学部／韓国
 全南大学校 工学部／韓国
 慶北大学校 工学部／韓国
 忠南大学校 工学部／韓国
 柳韓大学校 工学系列／韓国
 国立獣医科学検疫院 獣医科学研究所／韓国
 ソウル大学校 医科大学／韓国



 台湾国立高雄科技大学 先端金型研究開発センター／台湾
 長庚大学 工学部／台湾
 国立中央大学 文学院／台湾



 シカゴ大学 医学部／米国
 アメリカ国立衛生研究所
 国立心肺血液研究所／米国
 アーカンソー大学
 フォートスミス校／米国

 ハワイ大学 医学部／米国

 南フロリダ大学 医学学群／米国



 チュイロイ大学／ベトナム
 基盤 タイビン医科薬科大学 医・薬科学技術センター／ベトナム



 南太平洋大学 自然科学・工学・環境学群／フィジー



 ブルネイ・ダルサラーム大学 理学部／ブルネイ・ダルサラーム



 東ティモール国立大学 工学部／東ティモール

外国人留学生在籍数

5月1日現在の大学の外国人留学生在籍者数は294名（総学生数7,483名の3.93％）で、前年5月1日現在の294名と同数であった。

出身国別に見た場合、上位3カ国は1位中国109名（37％、前年度－6名）、2位インドネシア57名（19％、前年度＋14名）、3位ベトナム16名（6％、前年度－5名）であった。地域別に見た場合、88.9％がアジアからの学生であり、次いでアフリカ（4.8％）、ヨーロッパ（4.4％）、という内訳となっている。

学部・研究科別内訳

2024年5月1日現在

	学部		修士 専門職学位		博士		日研究生	その他	合 計
	正規	非正規	正規	非正規	正規	非正規			
教育学部／教育学研究科（専門職学位・修士）	1	0	0	5					6
地域科学部／地域科学研究科（修士）	10	4	21	2					37
医学部（医学科・看護学科）／医学系研究科（博士）	7	0			7	0			14
工学部／工学研究科（博士）	18	3			60	2			83
応用生物科学部	5	4							9
社会システム経営学環	0	3							3
自然科学技術研究科（修士）			62	2					64
共同獣医学研究科（博士）					2	0			2
連合農学研究科（博士）					55	1			56
連合創薬医療情報研究科（博士）					5	0			5
環境社会共生体研究センター								3	3
日本語・日本文化教育センター							4	8	12
合 計	41	14	83	9	129	3	4	11	294

その他は、学部・研究科以外所属の非正規生（日研究生除く）

連合大学院別内訳

研究科	正規		非正規	
	学生数	内配置大学が 岐阜大学	学生数	内配置大学が 岐阜大学
共同獣医学研究科（博士）	2	2	0	0
連合農学研究科（博士）	55	44	1	1
連合創薬医療情報研究科（博士）	5	5	0	0
合 計	62	51	1	1

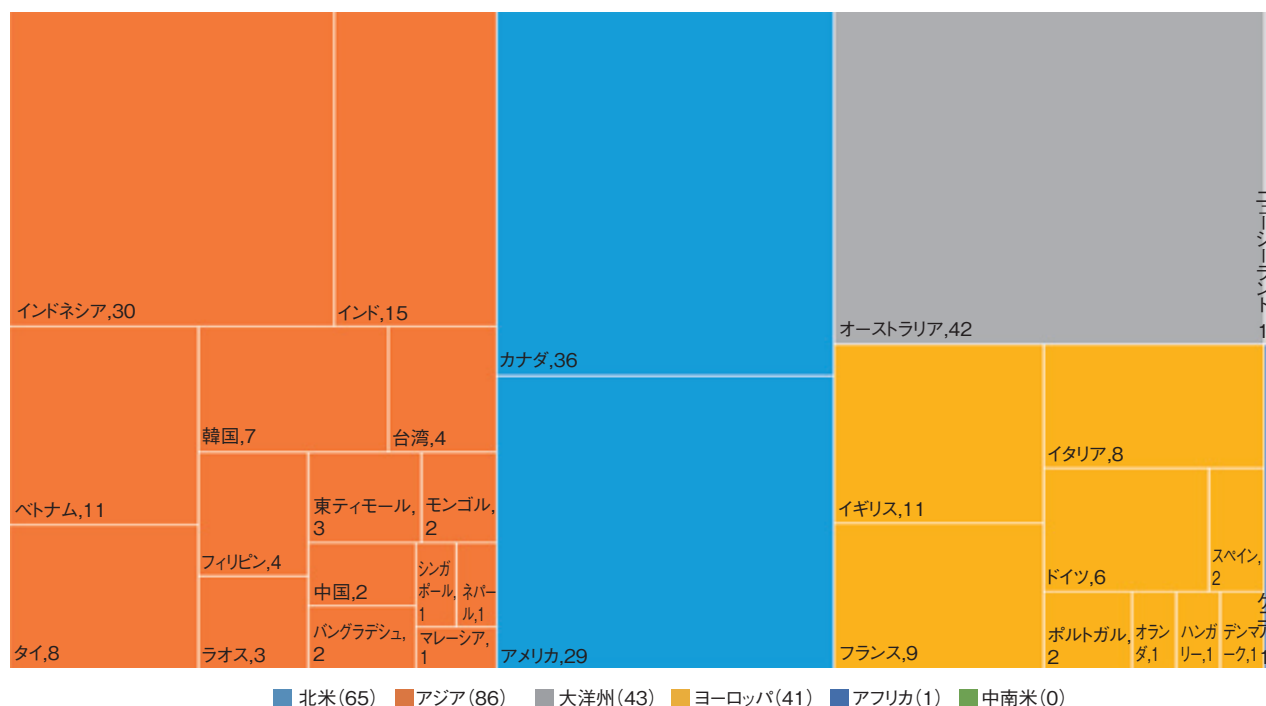
本学学生の海外派遣実績

本学学生の大学を通じた海外渡航実績は以下のとおりである。なお、岐阜大学基金等の海外渡航における助成金においては、私事渡航に対しても申請があり採択された場合、支援を行っている。

表1 本学学生の海外渡航者数（プログラム別・延べ数）

種別			渡航者数
全学	大学間学術交流協定に基づく交換留学		12
	岐阜大学春季派遣プログラム	春季アルバータ大学 EST プログラム	6
		春季アルバータ大学 ESL プログラム	3
		春季アルバータ大学 EFN プログラム	2
	岐阜大学サマースクールプログラム	夏季アルバータ大学 ESL プログラム	21
		夏季グリフィス大学 ESL プログラム	28
		夏季カリフォルニア大学デービス校 EST プログラム	3
	岐阜大学スプリングスクールプログラム	インド工科大学グワハティ大学との交流プログラム	10
	世界展開力強化事業	グローバルエキスパートプログラム	1
岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラム・グローバルリーダーコース	フエ大学学生交流プログラム	6	
部局	教育学部・教育学研究科	総合文化海外実習	4
		短期留学・研修	0
		学部間交換留学	1
	地域科学部	部局間学術交流協定に基づく交換留学	0
	医学部	海外臨床実習	17
		医学生交流プログラム	0
		看護学科主催短期派遣プログラム	3
	工学部・自然科学技術研究科・工学研究科	【工学部・自然科学技術研究科】工学系協定校学生交換留学プログラム（派遣）	6
		【工学部・自然科学技術研究科】工学部主催短期派遣プログラム	4
		【工学研究科】ジョイント・ディグリー・プログラム	0
	応用生物科学部・自然科学技術研究科	【応用生物科学部】国際獣医学インターンシップ演習	5
		【自然科学技術研究科】工学部主催短期派遣プログラム	1
		【自然科学技術研究科】ジョイント・ディグリー・プログラム	3
	連合農学研究科	ジョイント・ディグリー・プログラム	1
その他	トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラム		1
	バロー・V・ドラッグ		2
	研究留学		8
	学会		58
	調査		9
	個人留学		4
	研修		13
	インターンシップ		7
	名古屋大学主催短期派遣プログラム		4
合計			243

図1 本学学生の海外渡航先（延べ数）



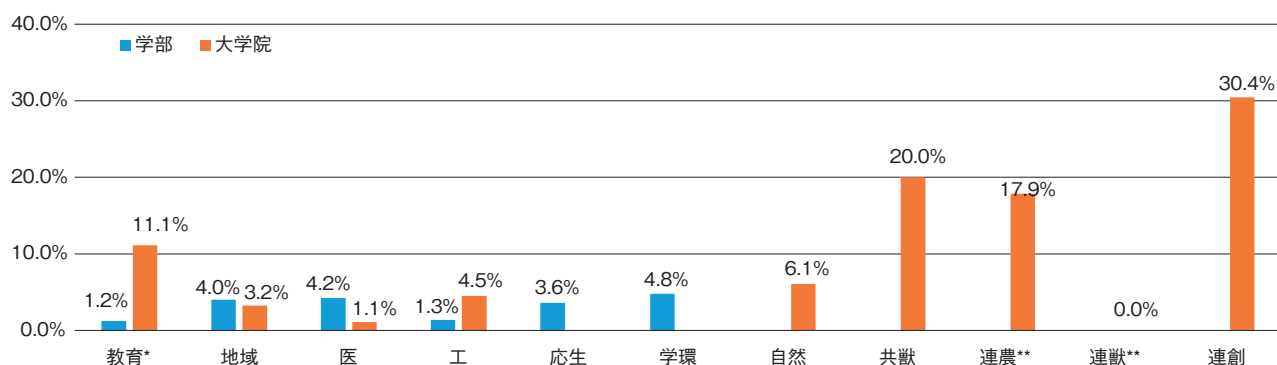
本学学生の渡航先地域（図1）としては、昨年度に比べ北米が17名、ヨーロッパが5名、渡航者が増加した。昨年度に引き続き、アジアが最大の渡航エリアとなった。令和6年度は、夏季アルバータ大学 ESL プログラムへの参加者の増加、また、春季アルバータ大学 EFN プログラムが初めて開催され、カナダへの渡航者が増加した。また、アジアの渡航先としてネパール、モンゴル、バングラディシュ、新たに加わった。

表2 本学学生の海外渡航者数（部局別・延べ数）

部局	学部生数	大学院生数	全学部生数	全大学院生数
教育学部 / 教育学研究科（専門職学位・修士）	12	1	962（－8）	92（＋7）
地域科学部 / 地域科学研究科（修士）	18	1	449（－7）	31（－2）
医学部(医学科・看護学科)/医学系研究科(修士・博士)	41	3	971（－4）	273（＋16）
工学部 / 工学研究科（博士）	29	5	2217（－16）	111（－4）
応用生物科学部	32	－	884（－7）	－
社会システム経営学環	6	－	125（＋31）	－
自然科学技術研究科（修士）	－	61	－	1004（＋37）
共同獣医学科（博士）	－	5	－	25（0）
連合農学研究科（博士）	－	22	－	123（＋6）
連合獣医学研究科（博士）	－	0	－	3（－2）
連合創薬医療情報研究科（博士）	－	7	－	23（＋3）

全学部生数・全大学院生数は2024年岐阜大学概要の数値を使用
（ ）内は前年度からの増減を示す

図2 本学学生の海外渡航率（部局別）



全学部生数・全大学院生数は2024年岐阜大学概要の数値を使用

* 教育は大学院学生数から専門職学位課程を除いた数を使用

** 連農及び連獣は全配置大学の学生をカウント

今年度の本学学生の海外渡航率（図2）においては、昨年度より地域科学部が0.7%、医学部が0.2%、工学部が0.1%、応用生物科学部が0.3%、自然科学研究科が1.0%、共同獣医研究科12.0%増加した。また、昨年度渡航実績が0人であった地域科学研究科、医学系研究科については、今年度は渡航実績ができた。

全体的に渡航者数が増えており、コロナ禍以前の渡航者数に戻りつつある。



トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラムとは？

文部科学省は、2014年度より実施してきた「日本代表プログラム」の基本理念やコミュニティを受け継ぎつつ、より発展的に進化した事業として、将来、「自ら社会に変革を起こしていくグローバルリーダー」として日本の未来を創る人材を育成する新たなプログラム「新・日本代表プログラム」を開始しました。本学の学生も数多く、この制度を利用し、世界に旅立っています。

本学の採用実績は次のとおりです。

「日本代表プログラム」（平成26年度～令和4年度）

平成26年度	2014年9月－2015年3月	メルボルン大学	オーストラリア
	2014年12月－2015年9月	メルボルン大学	オーストラリア
	2014年9月－2015年9月	ランガラカレッジ	カナダ
平成27年度	2015年9月－2016年3月	ベルリン自由大学	ドイツ
平成28年度	2016年10月－2017年9月	ワーゲニンゲン大学、 ルーヴァンカトリック大学	オランダ、ベルギー
	2016年10月－2017年9月	テュレーン大学	アメリカ
	2016年10月－2017年9月	国立衛生研究所	アメリカ
	2016年10月－2017年3月	シンガポール国立大学	シンガポール
平成29年度	2017年9月－2018年8月	アルバータ大学	カナダ
	2017年11月－2018年9月	デュボン小児病院	アメリカ
平成30年度	2018年4月－2018年6月	シドニー大学	オーストラリア
	2018年9月－2018年10月	ミネソタ大学ツインシティー校	アメリカ
	2018年9月－2019年6月	イエナブラン教育協会、 ヨーク大学附属語学学校、 Eric Hamber Secondary School	オランダ、カナダ
	2018年9月－2019年9月	スイス連邦工科大学ローザンヌ校	スイス
	2018年10月－2019年9月	国立衛生研究所	アメリカ
令和元年度	2019年9月－2020年3月	スウェーデン王立工科大学	スウェーデン
令和2年度	2022年1月－2022年12月	農場フィールドワーク、 ヘルシンキ大学等	フィンランド、フランス、 イギリス、スペイン
	2022年2月－2023年2月	ロイヤルメルボルン工科大学	オーストラリア
	2022年4月－2023年3月	ザンビア大学	ザンビア
	2022年1月－2023年1月	アイオワ州立大学	アメリカ
	新型コロナウイルス感染症の影響により採用辞退	国立衛生研究所	アメリカ
	新型コロナウイルス感染症の影響により採用辞退	国立神経学脳神経外科学病院	イギリス
令和3年度	2022年3月－2023年3月	スイス連邦工科大学ローザンヌ校	スイス
	新型コロナウイルス感染症の影響により採用辞退	バイトダンス	シンガポール

「新・日本代表プログラム」（令和5年度以降）

令和5年度	2024年1月－2024年4月	オックスフォード大学、 南フロリダ大学	イギリス、アメリカ
令和6年度	2024年10月－2025年9月	ノッティンガムトレント大学、 上海交通大学	イギリス、中国

本学教職員派遣実績（令和6年度海外渡航者数調べ（延べ人数））

部局名	出張	研修	合計
教育学部・教育学研究科	25（3）	0（0）	25（3）
地域科学部・地域科学研究科	5（1）	0（0）	5（1）
医学部・医学系研究科	87（9）	8（0）	95（9）
医学部附属病院	51（0）	2（0）	53（0）
工学部・工学研究科	147（43）	0（0）	147（43）
応用生物科学部	31（12）	10（2）	41（14）
社会システム経営学環	0（0）	1（0）	1（0）
自然科学技術研究科	0（0）	0（0）	0（0）
共同獣医学研究科	0（0）	0（0）	0（0）
連合農学研究科	4（3）	0（0）	4（3）
連合獣医学研究科	0（0）	0（0）	0（0）
連合創薬医療情報研究科	7（3）	0（0）	7（3）
学術研究・産学官連携統括本部	3（0）	0（0）	3（0）
高等研究院	34（1）	0（0）	34（1）
糖鎖生命コア研究所	13（7）	0（0）	13（7）
地域協学センター	6（2）	0（0）	6（2）
教育推進・学生支援機構	1（0）	0（0）	1（0）
保健管理センター	4（1）	0（0）	4（1）
岐阜大学運営局	0（0）	0（0）	0（0）
グローバル推進機構*	14（10）	0（0）	14（10）
合計	432（95）	21（2）	453（97）

うち（ ）内は協定大学

* 令和6年度は、大学間協定大学であるアルバータ大学（カナダ）の職員海外実務研修を5年ぶりに開催し、事務職員1名が参加した。

外国人研究者・来訪者受入れ実績（令和6年度外国人研究者・来訪者受入数調べ（延べ人数））

部局名	研究者	来訪者	国（研究者）	国（来訪者）	合計
教育学部・教育学研究科	0（0）	0（0）			0（0）
地域科学部・地域科学研究科	0（0）	0（0）			0（0）
医学部・医学系研究科	0（0）	3（2）		オランダ、インドネシア、カナダ	3（2）
医学部附属病院	0（0）	8（0）		タイ、韓国	8（0）
工学部・工学研究科	2（1）	10（0）	中国、フランス	スイス、マレーシア、イタリア、アメリカ、ドイツ、ブラジル	12（1）
応用生物科学部	1（0）	3（2）	エジプト	インド、タイ、マレーシア	4（2）
社会システム経営学環	0（0）	0（0）			0（0）
自然科学技術研究科	0（0）	0（0）			0（0）
共同獣医学研究科	0（0）	0（0）			0（0）
連合農学研究科	0（0）	20（11）		インド、インドネシア、ベトナム、フィリピン、ルーマニア、バングラディシュ	20（11）
連合獣医学研究科	1（0）	0（0）	バングラディシュ		1（0）
連合創薬医療情報研究科	0（0）	0（0）			0（0）
学術研究・産学官連携統括本部	0（0）	1（1）		ドイツ	1（1）
高等研究院	0（0）	4（2）		オランダ、タイ、アメリカ	4（2）
糖鎖生命コア研究所	1（0）	9（4）	アメリカ	イタリア、アメリカ、フランス	10（4）
地域協学センター	0（0）	0（0）			0（0）
教育推進・学生支援機構	0（0）	0（0）			0（0）
保健管理センター	0（0）	0（0）			0（0）
岐阜大学運営局	0（0）	0（0）			0（0）
グローバル推進機構	9（9）	48（41）	東ティモール民主共和国	モロッコ、タイ、インド、インドネシア、モンゴル、中国、アメリカ、リトアニア、ザンビア	57（50）
合計	14（10）	106（63）			120（73）

うち（ ）内は大学間・部局間学術交流協定大学

国際協力活動（JICA 事業）

本学の理念である「学び、究め、貢献する」に基づき、グローバルな視点においても社会貢献、また、有為な人材育成を行うため、積極的な国際協力活動を行っている。これまで本学が行ってきた国際協力機構（JICA）による専門家派遣、外国人研修員受入れ及び学位課程就学者受入れ等について、今後も引き続き協力をを行うと同時に、海外の大学及び関係機関等と国際的なネットワークを構築し、教育研究の国際化を図ることで、世界に開かれた大学を目指す。

本年度に実施された国際開発協力一覧（JICA 事業）

種別	部局	国名	プロジェクト名	人数	協力期間
学位課程 就学者受入	工学研究科	東ティモール	科学技術イノベーション人材育成	1名	2020.10.1-2024.9.30
		チリ	道路アセットマネジメントコース	1名	2023.4.1-2026.3.31
		ラオス	道路アセットマネジメントコース	1名	2024.4.1-2027.3.31
	自然科学技術研究科	ガーナ	ABE イニシアティブ	1名	2022.10.1-2024.9.30
		ザンビア	道路アセットマネジメントコース	1名	2023.4.1-2025.3.31
		フィリピン	道路アセットマネジメントコース	1名	2023.4.1-2025.3.31
受託研修員 受入	工学部	東ティモール	東ティモール国立大学工学系大学院設立 能力強化 電気・電子工学	1名	2024.6.4-2024.7.11
			東ティモール国立大学工学系大学院設立 能力強化 機械工学	4名	
			東ティモール国立大学工学系大学院設立 能力強化 情報工学	2名	
			東ティモール国立大学工学系大学院設立 能力強化 電気・電子工学	1名	2025.1.21-2025.2.27
			東ティモール国立大学工学系大学院設立 能力強化 地質・石油工学	1名	
専門家派遣	工学部	東ティモール	東ティモール国立大学工学系大学院設立 支援アドバイザー	1名	2024.8.10-2024.8.18
				1名	2024.8.12-2024.8.25
				1名	2025.2.22-2025.3.2
				1名	2025.3.8-2025.3.16

JICA 東ティモール事業

『東ティモールでは1999年8月の独立を問う直接投票後の混乱により、多くの住民が避難を余儀なくされ、教育機関を含む物的インフラの7割以上が破壊・使用不可能となるなど甚大な被害を被った。東ティモール人材の育成の観点から、インドネシア時代の旧東ティモール・ポリテクニクを母体として工学部に電気／電子工学科、機械工学科、土木工学科を設置したが、東ティモールでは高等技術教育体制の整備・運営に係る経験・知識が不足しており、日本に支援を要請してきた。』

日本としては、東ティモールの支援要請に応え、2001年より東ティモール大学工学部各学科のカリキュラムの策定、緊急無償資金協力による施設復旧・機材供与、電気・電子工学科に対して実習指導の専門家派遣を行ってきたところである。』¹⁾

本学は2003年から、JICA 東ティモール事業「JICA 東ティモール大学工学部支援プロジェクト」、さらに2011年からは「東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクト」²⁾、2016年からは同プロジェクト第2フェーズ³⁾の協力機関として、同国を支援している。

- 1) 東ティモール大学工学部支援プロジェクト
(<https://www.jica.go.jp/oda/project/0601585/index.html>)
- 2) 東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクト
(<https://www.jica.go.jp/oda/project/1000106/index.html>)
- 3) 東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクトフェーズ2
(<https://www.jica.go.jp/oda/project/1600474/index.html>)

1)



2)



3)



短期研修プログラム

【短期研修プログラム（派遣）】

短期研修プログラム（派遣）は、その国の言語や文化を集中的に勉強するプログラムであり、短期間海外で生活することで国際感覚を高め、言語力を向上させ、今後の国際交流・海外留学等への契機となることを目的に実施している。令和6年度については、夏には、カリフォルニア大学デービス校（アメリカ）において、理系学生向け実践科学英語研修である English for Science and Technology（EST）プログラムが開催され、本学からは初めて3名の学生が参加した。また春にはアルバータ大学において English for Nursing（EFN）が初めて開催され、本学から2名が参加した。

大学名	グリフィス大学（オーストラリア）
プログラム名	English as a Second Language（ESL）
プログラム実施期間	8月27日～9月29日 ※移動日を含む
内容	一般英語研修
参加人数	29名（うち名古屋大学学生1名）

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	English as a Second Language（ESL）
プログラム実施期間	8月31日～9月29日 ※移動日を含む
内容	一般英語研修
参加人数	22名（うち名古屋大学学生1名）

大学名	カリフォルニア大学デービス校（アメリカ）
プログラム名	English for Science and Technology（EST）
プログラム実施期間	8月9日～9月6日
内容	実践科学英語研修
参加人数	3名

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	English for Science and Technology（EST）
プログラム実施期間	2025年2月20日～3月24日 ※移動日を含む
内容	実践科学英語研修
参加人数	7名（うち名古屋大学学生1名）

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	English for Nursing（EFN）
プログラム実施期間	2025年2月20日～3月24日 ※移動日を含む
内容	看護学分野の英語研修
参加人数	2名

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	English as a Second Language（ESL）
プログラム実施期間	2025年2月20日～3月24日 ※移動日を含む
内容	一般英語研修
参加人数	3名

【サマースクール（夏期短期語学研修：受入れ）】

令和6年度の岐阜大学サマースクール（受入れ）は、6月中旬から7月中旬までの期間で実施した（日本語及び日本文化の教育担当は日本語・日本文化教育センター）。本プログラムで養成を目指す人材は、日本を理解し応援してくれる海外の人々である。日本語授業はもちろんのこと、本物に触れる日本文化体験（美濃紙すき、日本刀鍛冶見学体験・現役能楽師によるワークショップ等）、地域性を生かした学外活動（郡上市における文化交流やホームステイ等）、日本人学生との交流機会等を提供している。本プログラムは今回の実施が35回目、岐阜大学の協定大学のうち3校から合計9名の学生が参加した。

〔成果報告〕

サマースクールレポート：グローバル推進機構 HP に掲載

https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/summer_school_program/



【Collaborative Video Making Program】

ジョイント・ディグリー・プログラムの相手大学であるインド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学、そして本学の3大学の学生が参加するオンライン交流事業 Collaborative Video Making Program (CVMP) を実施した。CVMP は令和2年度から毎年開催しており、令和6年度で5回目の開催となる。

このプログラムでは、3大学の学生が4グループに分かれ、“Thinking about SDGs”というテーマのもと、動画作品の共同制作を行った。今年度から SDGs の講義を2回開催し、参加学生の SDGs についての理解を深めた。

そして Final Competition を、12月12日に Zoom Webinar 及び OKB 岐阜大学プラザでの対面のハイブリットにて開催した。学生が制作した動画作品の発表を行い、特別審査員が講評を行った。最後には、特別審査員による採点及び視聴者投票が行われ、グループ1の作品「Beat the Heat」が最優秀作品に決定した。

また、本プログラムで制作された動画作品は、GU-GLOCAL Channel から視聴できる。



対象大学	インド工科大学グワハティ校（IITG）、マレーシア国民大学（UKM）
実施期間	7月11日—12月12日
参加人数	15名：IITG 3名、UKM 5名、岐阜大学7名

〔GU-GLOCAL Channel〕

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLrNWL5oYxiK9aHppLz9nEMlRcTuARBk3c>



〔CVMP Web サイト〕

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/videomaking/>



【Winter School（受入れ）】

ジョイント・ディグリープログラムの相手大学であるインド工科大学グワハティ校（IITG）、マレーシア国民大学（UKM）の学生を本学にて受け入れる、ウィンタースクールを実施した。第8回目となる本年は、12月5日～20日にかけて実施し、IITG から6名、UKM から2名の学生が来学した。

本年度は「日本の食品を科学する」というテーマにて開催し、2週間という短い期間に、参加学生らは企業や日本学生との交流、研究活動、日本文化体験等のプログラムを行った。

最終日の12月20日には本プログラムを通して学んだことを発表する最終報告会を執り行い、ポスタープレゼンテーションにて発表を行った。



対象大学	インド工科大学グワハティ校（IITG）、マレーシア国民大学（UKM）
実施期間	12月5日～20日
参加人数	8名：IITG 6名、UKM 2名

[ウィンタースクールレポート]

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/folder1/>



【Spring School Program（派遣）】

全学を対象とした短期派遣プログラムであるスプリングスクールプログラムを実施した。本プログラムはジョイント・ディグリープログラム（JDP）の相手大学であるインド工科大学グワハティ校（IITG）へ2週間程滞在するプログラムである。2025年3月3日から15日にかけて第4回スプリングスクールプログラムが開催され、本学学生10名が参加した。

IITG と本学との共同開催のジョイント・ディグリーシンポジウム2025会場での開校式から始まり、国立公園見学や民俗博物館などの見学、現地企業である、自然農法の普及センターや生物農薬メーカーの訪問を行った。学内では、デザイン学科でのジュート（黄麻）の活用方法のワークショップや、JDP 関連学科を中心としたラボツアーが開催された。また、本プログラムを通じて現地学生との交流も深めた。

最終日には、英語でのポスタープレゼンテーションを見事にこなし、修了証書を受け取った。



対象大学	インド工科大学グワハティ校（IITG）
実施期間	2025年3月3日～15日
参加人数	10名

[Spring School Program Web サイト]

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/springschool/>



3. 国際交流活動

国際協働教育・地域国際化関連

6月～
2025年2月 グローカル化のためのSDGs勉強会

オンライン



地域のグローカル化の推進を目的に、本学が有する人的ネットワークを活用した「グローカル化のためのSDGs勉強会」がウェビナー形式で計5回実施され、延べ137名が参加した。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/region/sdgs/session/>



4月4日 岐阜大学 JDP コンソーシアム竹資源利用勉強会

オンライン



4月4日、岐阜大学グローカル推進機構 地域国際化推進部門において、「岐阜大学 JDP コンソーシアム竹資源利用勉強会」を開催した。本勉強会は、インド竹資源利用に関する最新情報の共有とコンソーシアム企業および団体間の連携促進を図ることを目的に、オンライン形式で開催された。当日は、46名が参加し、インド市場への日本企業進出の現状と課題について専門家を招きディスカッションを行い、次いで竹資源利用等に関する6件の話題提供に対し意見交換を行った。勉強会登壇企業の中には、3月の日印 JDP シンポジウムに現地参加した日本企業や本学と竹資源利用について意見交換を重ねるインド企業が含まれ、インド竹資源利用の最新情報を共有する機会となった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/region/information/000785.html>



4月5日
7月24日 岐阜大学・インド工科大学グワハティ校国際連携食品科学技術専攻（修士課程）の学生（岐阜大学・IITG）が両校にて勉学を開始

対面



4月5日、岐阜大学・インド工科大学グワハティ校国際連携食品科学技術専攻（修士課程）の新年度ガイダンスが岐阜大学で行われ、岐阜大学を主大学とする学生3名とインド工科大学グワハティ校（以下、IITG）を主大学とする学生5名が本学での勉学を開始した。そして7月24日には、本専攻の岐阜大学を主大学とする学生3名とIITGを主大学とする学生4名が、IITGでの勉学を開始した。日印学生は共に顔を合わせて学び合い、国際共同学位取得という共通目標に向かって切磋琢磨していく。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000789.html>

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000812.html>



5月9日 中部経済産業局及び中部経済連合会との連携企画「Meet up Chubu vol.39」

ハイブリット



5月9日、ナゴヤイノベーションズガレージ及びオンラインにて、中部経済産業局及び中部経済連合会との連携教育「Meet Up Chubu vol.39」を開催した。

地域国際化推進部門では、グローカル人材の就職促進と地域・産業界間の国際連携を支援しており、「地域・産業界の国際連携」活動の一環として、中部経済産業局及び中部経済連合会との連携企画「Meet up Chubu vol.39」連携企画を開催した。当日は255名が参加し、今回の企画のテーマであるカーボンニュートラル、バイオマス、竹資源活用について、4つの開発事例と5つの支援事例の発表があり、様々な開発や支援の取り組み情報などを共有する機会となった。地域国際化推進部門では、今後もグローカル人材の就職促進と地域・産業界間の国際連携を支援する取り組みを行っていく。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/region/information/000865.html>





12月6日

岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2024

ハイブリット



12月6日、オンライン（Zoom）および一部対面にて、本年度で6回目となる「岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2024」を開催した。東海国立大学機構主催のメインシンポジウムは、「多文化共生を促進するジョイント・ディグリー～教育研究の国際化と地方創生～」をテーマに開催され、対面及びオンラインで119名が参加した。冒頭、松尾 清一 機構長と吉田 和弘 大学総括理事・副機構長（岐阜大学長）が開会挨拶を行い、続いて文部科学省 高等教育局の武田 久仁子 専門官が「留学生 Mobility の推進及び大学の国際化について」と題した基調講演を行いました。午後からの岐阜大学主催による産官学金連携セッションには95名が参加し、「グローバル化による地球課題解決への挑戦」をテーマに、JDP に協力した企業への感謝状贈呈が行われました。工学部では企業のブース展示も開催され、産学連携の具体的な取組や成果が紹介されるなど、終日にわたり充実したプログラムとなった。

参照：<https://www.jdsymposium.jp/>



2025年

1月24日

第2回 C²-FRONTS 国際連携推進連絡会

ハイブリット



1月24日、岐阜大学主催の「第2回 C²-FRONTS 国際連携推進連絡会」を開催した。慶應義塾大学の井上 先生にオンラインでご参加いただき、「マイクロクレデンシャルの国内外の最新動向と国際連携」についてご講演いただいた。本会には、本学のほか信州大学、静岡大学、名古屋大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、三重大学、豊田工業高等専門学校の国際担当副学長・副総長・副校長の皆様にご参加いただいた。今後も国際連携を推進するため、関連機関との情報共有を深め、さらなる発展に向けて取り組んでいく。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/region/information/000913.html>



2025年

1月30日

『グローバルな視点は新しい価値をどう生み出すのか』
国際協働教育推進部門セミナー

ハイブリット



1月30日、岐人工知能研究推進センター及び工学部 電気電子・情報工学科 情報コースと共催で『グローバルな視点は新しい価値をどう生み出すのか』をテーマに安野 貴博 氏（AI エンジニア・起業家）による基調講演後、茂木 健一郎 先生（脳科学者）をはじめ本学の AI や美術史、国際に関わる教授陣も交えてのパネルディスカッションを開催した。学生・教職員・一般の方 約95名、オンラインからは65名が参加した。各パネリストの海外経験を踏まえて、それぞれの視点から有意義な議論が展開された。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000918.html>



2025年

3月3日～5日

JD シンポジウム2025

ハイブリット



3月3日～3月5日、「大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～」の活動の一環として、インド工科大学グワハティ校（IITG）とグワハティ ジョイント・ディグリーシンポジウム2025を共同開催した。今回のシンポジウムは、JDP を始めとする国際協働教育と社会変革に必要な研究開発について、インド農村開発ならびにインド北東部（NER）開発を加速する日印連携についての議論を目的に、IITG キャンパスにおいてハイブリッド形式で開催され、2日間でオンラインを含む延べ176名の方にご参加いただいた。3月3日、3月4日は、学術および産業に関するシンポジウムを開催し、同シンポジウム内でスプリングスクールプログラムの開校式を行った。3月5日には研究施設・企業訪問を行った。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000931.html>



留学推進・国際企画関連

4月22日 2024年度サマースクール（派遣）説明会

対面

4月22日、アルバータ大学 ESL/EST、グリフィス大学 ESL を対象とした説明会を開催した。学生85名が、参加し、夏期休暇を利用し短期留学を経験できる本プログラムへ興味を示していた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000781.html>

4月24日
11月20日 海外留学フェア2024 春・秋

対面

4月24日、『海外留学フェア2024春～踏み出そう、留学への第一歩～』を開催し、110名が参加した。そして、11月20日、「海外留学フェア2024秋 ～広げよう、留学の輪～」を開催し、35名が参加した。本フェアでは、本学の留学プログラムや支援制度に関する説明、英語能力試験（TOEFL 及び IELTS）の概要、サマースクールプログラム詳細、交換留学及びバロー・V ドラッグ海外研修奨学金制度等により留学した学生の留学経験に基づく発表等が行われた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000787.html>

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000882.html>



7月3日 2024年度海外渡航危機管理オリエンテーション

対面

7月3日、「2024年度 海外渡航時の危機管理オリエンテーション」を開催し、94名が参加した。本オリエンテーションは、留学や海外旅行を予定している学生・教職員などを対象とし、事件や事故に巻き込まれないための意識啓発のほか、健康管理なども含め幅広く危機管理意識を醸成することを目的として開催している。医療的準備と自己健康管理、危機意識やリスク、安全対策等の講演が行われた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000796.html>



7月18日 GU-GLOCAL シンポジウム「世界に翼を広げたら」

ハイブリット

7月18日、大学生・高校生の積極的な国際化プログラムへの参加を促すことを目的として、シンポジウム「世界に翼を広げたら」を開催した。本シンポジウムは2部のセッションで構成され、セッション1は、インドを拠点として企業のインド進出支援等を行うインフォブリッジ・ホールディングス・グループ代表取締役の繁田 奈歩氏を迎え、「平均年齢28歳！若者大国インド」をテーマに行った。セッション2は、ニューヨークを拠点に世界を代表するブランドのデジタル戦略等を手がけるクリエイティブディレクターのレイ イナモト氏をメインスピーカーに迎え、「海外で輝くためのマインドセット」をテーマに行った。対面では264名、リアルタイム配信からは188名が参加し、壇者達の熱い思いに多くの参加者が耳を傾けました。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000813.html>





10月29日 駐日リトアニア大使特別公演会

対面



10月29日、岐阜大学講堂にて、「リトアニア NOW2024」の一環として駐日リトアニア共和国 特命全権大使 オーレリウス・ジーカス大使による特別講演会を開催した。ジーカス大使は、同国の地理的特徴、文化、歴史、現在のリトアニア社会やウクライナ支援などの現状について、丁寧な日本語で分かりやすく語り、学内外から参加した約200名の参加者が興味深く聞き入った。講演会終了後には、大使による著書へのサイン会及び学生・高校生約30名との交流会が行われ、リトアニアについての知見をさらに深める機会となった。本講演会をきっかけに、学生・教職員・地域の方々のリトアニアに関する知識が深まり、本学とリトアニアの大学との交流がさらに促進されることが期待される。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000868.html>



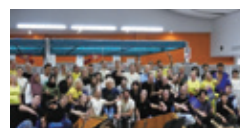
10月17日 カウナス工科大学学生との交流会

対面



10月17日、生協第二食堂にて、学術交流協定大学であるリトアニアのカウナス工科大学学生らによるフォークダンスグループ「ネムナス」との学生交流会を開催し、ネムナスメンバーの他、本学学生や教職員等も含む約80名が参加した。イベントでは、岐阜大学イングリッシュクラブによる岐阜大学と岐阜県の歴史・文化について英語の紹介やネムナスのメンバーによるカウナス工科大学の紹介、ダンスと歌の披露があり、多くの参加者も一緒に伝統的な歌と踊りの輪に加わった。その後の歓談の時間も設けられ、両大学の学生達が和やかに交流する様子が見られた。本学とカウナス工科大学は、2010年に大学間交流協定を締結して以来、学生・研究者交流を行っており、今回のイベントを機に、さらなる学生交流の促進が期待される。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000866.html>



11月13日 茂木健一郎先生と考える脳と AI のアライメント

ハイブリット



11月13日、岐阜大学人工知能研究推進センターおよび工学部電気電子・情報工学科情報コースと共催で「脳と AI のアライメント」をテーマに脳科学者の茂木健一郎先生による特別講演を TOIC プレゼンテーションエリアで開催した。知性をどう定義するかから始まり、茂木先生の提起する「Ikigai（生きがい）」の概念が最新の AI アライメントの原理となり「Ikigai risk」として議論されていることに言及され、日本での AI 研究の在り方を様々なレベルで考える必要性について述べられた。今後も学生・教職員や地域企業の皆様の知見を広げるための講演会や企画を積極的に開催していく。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000876.html>



2025年 1月15日 本学留学生の犬山旅行

対面



1月15日、本学留学生19名が犬山市へ半日旅行に出かけた。一行は、はじめに犬山城を訪れ、現地ガイドさんに犬山城の歴史を聞いたり、天守閣からの景色を楽しんだ。留学生からは、「日本の歴史や文化を知る有意義な旅だった」「留学生同士の交流ができる場を楽しみにしていた」「交通手段に困る留学生にとって、このような旅行は大変うれしい」などと好評を得て、早くも次回の旅行開催への期待を寄せる声が聞かれた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000919.html>



7月3日

杉原千畝記念館見学ツアー

対面



7月3日、学生及び教職員を対象とした「杉原千畝記念館 見学ツアー」を開催した。本ツアーは「八百津町を訪問し、人道的な国際人である杉原 千畝氏について学ぶ」ことを目的に行われ、当日は学生13名、教職員4名の計17名が参加した。現地到着後、記念館ガイドである山田 和実氏による、人道の丘のモニュメントと命のビザモニュメントの案内があり、記念館内では、山田 利幸 館長による挨拶の後、山田 和実氏による「命のビザ」の背景として、杉原千畝氏の生い立ちから外交官としての活躍に至るまでの経緯などが紹介された。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000811.html>



留学生就職促進プログラム関連

10月30日

岐阜地区ワークショップ

対面



10月30日、岐阜大学全学共通教育講義棟において、第7回目である2024年度愛岐留学生就職支援コンソーシアム岐阜地区ワークショップを開催した。2部構成で行われ、第一部では株式会社キョウワの代表取締役社長 白田 龍司氏と、株式会社テクノプレニードヒダで活躍しているクンナラッタラ スワビス氏にご講演をいただいた。第二部では、留学生が参加企業各社のブースを訪ねて面談を行った。本年度は企業から11社13名、留学生14名の参加があった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/isepp/information/000873.html>



11月30日

第23回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会

対面



11月30日、第23回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会が中日本自動車短期大学にて開催された。平成13年度より岐阜県内の教育機関に在学する外国人留学生の日本語学習意欲の喚起及び日本語の表現能力の向上を図ることを目的に行っている。留学生9名の本選出場者が約7分間の日本語のスピーチを行い、日頃の努力の成果を存分に発揮した。本学からは、交換留学生1名が参加し、日本語の表現能力の向上及び日本文化の認識につながる有意義な大会となった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/isepp/information/000885.html>



日本語・日本文化教育センター関連

5月29日 郡上踊りワークショップ

対面

毎年恒例の郡上踊りワークショップを、日本語・日本文化教育センター（日文センター）の和室において開催した。郡上市や郡上踊りに関する事前講義も行い、留学生が地域の文化を学べる機会とした。当日は約30人の留学生が参加した。ワークショップが始まる前に、希望者は美濃市の着付けグループの方々に浴衣を着付けてもらった。郡上市から3名の講師を招き、郡上市や郡上踊りの概要説明の後、郡上踊りの中でも代表的な曲「かわさき」と「春駒」の踊りを習った。留学生は手の動きや足の動きを丁寧に学び、休憩時間の間も教え合うなど練習に余念がなく、その熱意と上達ぶりは講師の方々を驚かせるほどだった。留学生にとって、日本や岐阜の文化を感じる貴重な機会となった。

参照：<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2024/06/entry05-13228.html>



7月10日 留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ

対面

日文センターでは、学生たちが能楽を通じて日本の伝統文化への理解と関心を深め、国際交流と異文化理解を促進することを目的として、2005年度からプロの能楽師による能楽（能・狂言）ワークショップを行っている。6月から本学に留学しているサマースクール参加学生を含む35名の参加者が集い、日本の伝統文化を堪能した。講師として観世流シテ方の味方團氏及び田茂井廣道氏（以上能の講師）、大蔵流狂言方の茂山忠三郎氏及び山口耕道氏（以上狂言の講師）の4名を日文センター和室にお迎えした。能楽・狂言の実演や、歴史や音楽の講義、能装束の着付けといった盛りだくさんの内容で、本物の日本の文化を間近で体験できる貴重なイベントとなった。

参照：<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2024/07/entry18-13313.html>



12月11日 十二単の着装と体験—日本の民族衣装— （日本文化ワークショップ）

対面

日文センター和室にて、日本文化ワークショップ「十二単の着装と体験—日本の民族衣装—」を開催した。当日は、インド工科大学グワハティ校とマレーシア国民大学から受け入れているウィンタースクール参加学生をはじめ、本学に在籍する留学生や日本人学生及び教職員など、50名以上が参加した。本ワークショップでは、和服の着付けを専門に指導されている伊藤慶子（豊装慶）氏をはじめとした5名の講師陣によって指導が行われた。箏（こと）の生演奏も披露され、荘厳で優美な雰囲気の中で、参加者たちに十二単の魅力が伝えられた。日文センターの土谷教授から日本語・英語の両言語で日本の歴史や十二単の基礎知識の説明があった後、着付けモデルとなる代表者に着付けが施された。作法に従い、鮮やかな衣をまとっていく様子に、参加者たちは興味深く見入っていた。日本の伝統文化の奥深さ、美しさを堪能することができた有意義な時間となった。

参照：<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2024/12/entry18-14080.html>



上記の詳細や、その他のイベントについては『岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要2024』を参照ください。



学内の国際化の取組

* 海外留学フェア2024春（4月24日）、海外留学フェア2024秋（11月20日）

「海外留学フェア春」は、交換留学や短期間の海外派遣プログラムに関する情報を提供し、留学の促進を図ることを目的として開催している。本イベントには、過去に留学を経験した学生が登壇し、自己の貴重な経験を振り返りながら、各プログラムの魅力について紹介した。今年度は新入生をはじめとし、学生・教職員合わせて110名が参加した。

また、秋についても「海外留学フェア秋」として、春と同様のイベントを開催し、学生・教職員合わせて29名が参加した。



海外留学フェア2024春プログラム	
開会挨拶	グローバル推進機構 小山 博之 機構長
留学に関する説明	留学支援係
留学に必要な英語力	
TOEFL	ETS Japan 合同会社 星川 朗 氏
IELTS	(公財)日本英語検定協会 山田 みよ子 氏(オンライン)
岐阜大学の留学プログラム	
オーストラリア・グリフィス大学 ESL プログラム	地域科学部3年 築田 音緒 さん
カナダ・アルバータ大学 ESL プログラム	教育学部2年 下野 杏香 さん
交換留学	
オーストラリア・シドニー工科大学	地域科学部4年 伊藤 萌梨 さん
スプリングスクール	教育学部3年 村松 幸騎 さん
フェ大学学生交流プログラム	教育学部3年 馬着 華凜 さん
教育学部主催短期派遣プログラム	
アメリカ・ノーザンケンタッキー大学	教育学部 巽 徹 教授
医学部看護学科主催短期派遣プログラム	
アメリカ・ワシントン大学	医学部看護学科2年 長久保 美早さん
名古屋大学主催短期派遣プログラム	
オーストラリア・西オーストラリア大学	教育学部3年 浅野 柊太さん

海外留学フェア2024秋プログラム	
開会挨拶	グローバル推進機構 嶋 睦宏 副機構長
留学に関する説明	留学支援係
岐阜大学の留学プログラム	
オーストラリア・グリフィス大学 ESL プログラム	工学部2年 清水 真央 さん
カナダ・アルバータ大学 ESL プログラム	地域科学部3年 築田 音緒 さん
カナダ・アルバータ大学 EST プログラム	自然科学技術研究科2年 各務 竜太郎さん
アメリカ・カリフォルニア大学デービス校 EST プログラム	工学部3年 田中 絢さん
交換留学	
オーストラリア・グリフィス大学	地域科学部3年 石井 晶さん
教育学部主催短期派遣プログラム	
アメリカ・ノーザンケンタッキー大学	教育学部1年 渡邊 明日香さん、教育学部1年 長屋 清子さん、教育学部1年 堀口 桜さん、教育学部1年 杉藤 楓華さん
医学部看護学科主催短期派遣プログラム	
アメリカ・ワシントン大学	医学部看護学科2年 白井 智子 さん

* 若手研究者支援（海外研修プログラム）

本学グローバル推進機構では、協働教育担当者の充実を図るために、「岐阜大学若手・中堅研究者海外研修プログラム」を実施し、海外研修を行う者への支援を行っている。これは、様々な制約から海外での研究経験を積む機会が乏しかった若手・中堅の教員を対象としたものである。令和2年度より新型コロナウイルス感染症の影響により海外渡航が困難となっている状況に鑑み、特例措置として海外研究機関との共同研究を促進するための支援として実施していたが、令和4年度より、海外研修を行う者へ海外渡航への支援を再開した。

令和6年度採択者

所属部局	氏名（職名）	共同研究機関（国名）	助成額	報告書
社会システム 経営学環	出村 嘉史 (教授)	デルフト工科大学 (オランダ)	500,000円	
連合創薬医療 情報研究科	平島 一輝 (G-YLC 特任助教)	ルーベン大学（ベルギー） ノースカロライナ州立大学（アメリカ）	500,000円	

* 海外協定大学連携強化交流事業

グローバル推進機構では、コロナ禍で交流が困難であった海外協定大学との連携強化を図るため、令和4年度から令和5年度に「海外協定大学連携強化交流事業（ポストコロナ対応）」を実施し、各部局等における海外協定大学等との交流活動の再開を支援を行ったが、コロナ収束に伴い令和5年度を以って本事業は終了とした。

大学の世界展開力強化事業

令和4年度大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～」とは：

文部科学省が公募する本プログラムは、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力を強化するため、日本人学生の海外留学と外国人学生の受入れを行う国際教育連携の取組を5年間継続支援するものである。

本プログラムにおいて、岐阜大学はインド工科大学グワハティ校、岐阜・東海地域及び北東インド地域の産官学と連携した各種取り組みを通じて、高度人材育成及び地域・国際社会の発展に貢献していくこととし、採択された。

*プログラムのポイント

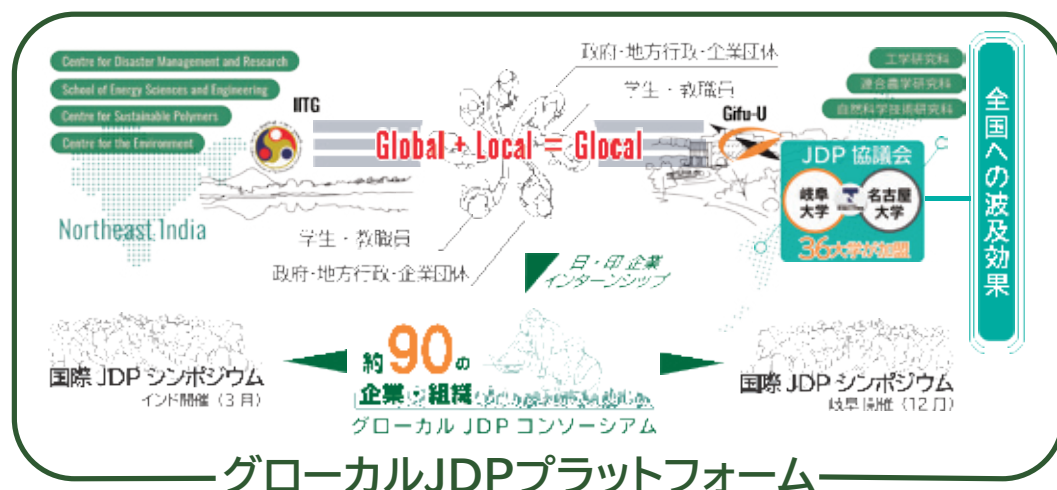
3専攻の国際連携専攻（以下、「JDP」という。）を設置・運営する岐阜大学とインド工科大学グワハティ校を中心に、岐阜を中心とする東海地域や北東インド地域の産官学（JDP コンソーシアム）が協働して国際連携教育に貢献するグローバル JDP プラットフォームを形成する。それを活用することにより「食品・サプライチェーンエキスパート」、「減災・防災エキスパート」、「サステナブルエネルギーエキスパート」等の修了証発行型教育プログラムを構築し、グローバル高度人材を育成する。

*主な取組

- ・地球規模課題の理解や国際的な共創体験ができる学部学生向けの短期留学や長期継続型オンライン交流プログラム及び産学連携・国際共同研究等のリーダー育成に向けた大学院学生向けの修了証発行型プログラムを構築し、段階的・体系的なプログラムを提供
- ・国際展開する JDP コンソーシアム加盟企業におけるインターンシップの実施とアントレプレナー教育により、国際的に活躍できるグローバル高度人材を育成
- ・国際シンポジウムの実施により、JDP コンソーシアム加盟企業・組織の相互交流機会を創出し、両地域の課題を世界的な視点で解決するアイデアの共創
- ・大学の国際化促進フォーラムや全国大学 JDP 協議会を活用し、グローバル JDP プラットフォームを全国の大学へ展開

グローバルJDPプラットフォーム

日印で定期開催するシンポジウムを通じて、産官学、連携大学が参加する場、「グローバルJDPプラットフォーム」を形成する。



〔大学の世界展開力強化事業 Web サイト〕 <https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/jdp-platform/>



地域国際化の取組

* Glocal Lesson

Glocal Lesson は、2021年夏に公開を開始し、「地球規模で考えながら地域の課題を解決する」グローバル人材の育成を目指す岐阜大学グローバル推進機構が配信・対面・リアルタイムで提供する学習プラットフォームである。

登録情報（2025年3月1日時点）

公開動画数：222本（有料110本 / 無料112本）

掲載講師数：98名

収録動画の総時間数：約85時間

R6年度リアルタイム配信実施回数：10回

R6年度対面講義実施回数：3回

会員数：1,188名

（内訳）有料会員（月額2,500円）2名

無料会員933名

特別会員（東海国立大学機構アドレス）253名



[Glocal Lesson Web サイト]

<https://www.gu-glocal.com/>



全国大学 JDP 協議会

全国大学 JDP 協議会とは：

本協議会は令和4年4月に設置され、ジョイント・ディグリープログラム（JDP）を開設、あるいは開設を予定している大学が、JDPの運用における課題の改善や情報共有、JDPの活用の方策並びに今後の展望についての検討、JDPに関する意見・要望等のとりまとめ及び文部科学省への提言、新規JDP立ち上げ校に対するアドバイスを目的として組織している。

* 主な取組

10月15日、岐阜大学が会長大学を務める全国大学JDP協議会において、第3回総会をオンラインにて開催し、14大学1機関105名の出席があった。

総会では、文部科学省高等教育局 佐藤 邦明 参事官（国際担当）による講演「ジョイント・ディグリー・プログラム及び大学間交流の推進について」が行われた。

続いて協議事項へ進み、JDP運用にあたっての問題点及び文部科学省への要望事項について協議された。

その後、JDP修了生の進路状況調査結果、令和6年度JDP設置意向調査結果、JDP関連のイベントの開催について報告があった。

本協議会は、今後も定期的に総会を開催し、JDPの成果やノウハウを共有しながら、より効果の高いJDPを全国に展開することを目指し、有意義な連携を図っていくこととしている。

[JDP 協議会 Web サイト]

<https://jdp-council.jp/>



留学生就職促進プログラム

愛岐留学生就職支援コンソーシアムとは：

文部科学省「留学生就職促進プログラム」の事業目的に賛同した愛知及び岐阜県下の大学、地方公共団体、経済団体及び企業団体が連携し、留学生の日本での就職支援を行うために設立されました。留学生就職促進プログラムは2021年度で終了しましたが、コンソーシアムの枠組みを活用し、引き続き就職支援の各種プログラムを実施します（図1 参画機関と全体像）。

*参画大学：

名古屋大学・岐阜大学・名古屋工業大学・名城大学・南山大学・愛知県立大学・中京大学

*コンソーシアムの目的：

留学生の就職支援のための教育プログラムの開催

*開催内容：

「ビジネス日本語教育」「キャリア教育」「インターンシップ」

参画機関と全体像

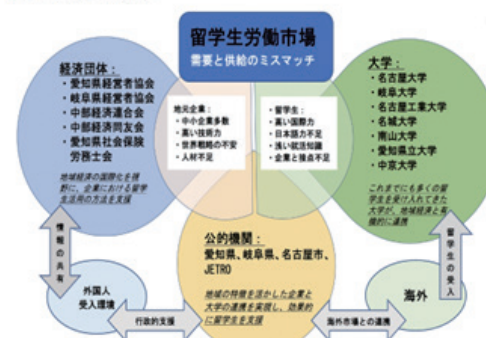


図1

*本学の取組

本学では、国内で就職を目指す留学生に次のプログラムを提供した。プログラムの一部は、本学が参画する愛岐就職支援コンソーシアムの構成大学の留学生へも提供した。

プログラム名	開催時期	取組内容
キャリア日本語	5月-7月 11月-2025年2月	キャリアプランニング、企業分析、エントリーシート、履歴書の書き方、グループディスカッション、面接練習など
就活ガイダンス 「夏インターンシップに向けた準備」	5月22日	日本で就職を目指す留学生へのキャリアガイダンス
就職活動支援講座	10月16日、 10月30日、 11月13日、 12月11日	「業界研究口座」「自己分析・ES対策講座」「面接対策講座」等の講座を実施
学生企業展 業界研究セミナー	12月14日- 12月15日	160社が出展し、「視野を広げたい」「企業の雰囲気を知りたい」「新たな出会いの場が欲しい」というニーズに応えた
岐阜地区ワークショップ 共催：岐阜県、岐阜県経営者協会、 ジェトロ岐阜	10月30日	第1部：「東海圏における高度外国人材の活用に向けて：定着促進支援の視点から」セミナー、 第2部：企業と留学生による交流会

開催件数：5件



岐阜地域留学生交流推進協議会

岐阜地域留学生交流推進協議会とは：

留学生交流推進会議は各都道府県46地域（2013年）に設置されている。岐阜県では平成2年2月に「岐阜地域留学生交流推進協議会」（以下、「岐留協」という。）が置かれた。

岐留協は、岐阜県内における留学生の円滑な受入れの促進と交流活動の推進を目的とし、会員は、岐阜県内に所在する大学、地方公共団体、経済団体、国際交流関係団体等43機関からなる。会長は岐阜大学長が務め、本学が事務局を運営している。

＊岐阜地域留学生交流推進協議会総会を開催（7月4日）

7月4日にオンラインにて岐阜大学が事務局を務める岐留協の総会を開催し、28機関が出席した。

総会では、岐留協会長の吉田 和弘 岐阜大学学長による開会挨拶の後、文部科学省高等教育局参事官（国際担当）付 参事官補佐・留学生交流室室長補佐 菊地勇次氏による講演「留学生政策をめぐる現状と取組」と題した講演が行われた。

その後、岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会に係る運営方法、令和5年度事業報告及び決算、令和6年度事業計画及び予算について審議し、承認された。

＊第23回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会を開催（11月30日）

11月30日、本学において、本学が事務局を務める「岐留協」の取組みのひとつとして、「第23回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会」を開催した（幹事校：本学）。

本大会は、平成13年度より岐阜県内の教育機関に在学する外国人留学生の日本語学習意欲の喚起及び日本語の表現能力の向上を図ることを目的に行っており、朝日大学、中部学院大学、中日本自動車短期大学、国際たくみアカデミー及び本学の留学生9名（5ヵ国）の本選出場者が約7分間の日本語のスピーチを行い、日頃の努力の成果を存分に発揮した。

なお、本弁論大会の実施にあっては、岐阜県経済同友会、岐阜県商工会議所連合会、岐阜県経営者協会及びライオンズクラブ国際協会 から御支援を得て開催した。

II. 各学部・研究科等の主な国際交流活動

1. 教育学部

カールスルーエ教育大学日本語クラス交流会

教育学部は、2015年よりカールスルーエ教育大学（ドイツ）との部局間協定を締結しており、その学生交流の一環として、前期は6月17日に、後期は11月25日、12月2日にカールスルーエ教育大学の日本語コースの学生と、教育学部の留学経験者や留学に興味を持っている学生による『オンライン交流会』が行われた。

交流会ではドイツ語のレッスン、互いの国の文化に関する紹介、4人～5人に分かれてのグループ交流が行われた。特にグループ交流では教員を目指す学生同士でドイツと日本の教育制度や学校行事、教員という職業についてなど、様々なテーマで交流を行うことができ、日本の教育のあり方について考えるきっかけとなった。



教育学部留学報告会 & 留学ニュースの作成（11月27日）

留学の成果報告と、留学に興味がある学生の情報収集の場として、11月27日に、3月～9月の間に短期留学を行った教育学部の学生による『教育学部 留学報告会』が開催された。当日は大学間協定を締結しているインド工科大学グワハティ校（インド）、ノーザンケンタッキー大学（アメリカ）、アルバータ大学（カナダ）、グリフィス大学（オーストラリア）に留学した7名が、それぞれの留学先に関する発表を行った。留学報告会には教育学部の教員・学生の他、他学部の教員・学生、留学生などが参加した。

また、留学をした学生の協力を得て、各学生の留学経験をまとめた留学ニュースを作成した。本紙は新入生を始めとする各学年のガイダンスの際に配布した。



国際交流委員会 International Exchange Committee 2025.4

留学ニュース Vol.4

総合文化海外実習（アメリカ）

数学教育講座 長屋 清子

私は2020年度ノーザンケンタッキー大学に短期留学しました。現地では、教育実習の様な形で中高校生や高校生に日本の文化を教える活動を行いました。

様々な活動がありましたが、現地で活動した際、国立大学の力に頼り続けることができました。また、日本との価値観を日々実感する中で自分の視野を広げることができました。

少しでも留学に興味がある方や長期留学の雰囲気をつかみたい方はぜひ参加してみてください。

社会科教育講座 杉原 楓華

アメリカにあるノーザンケンタッキー大学で3週間通い、プログラムの中ではアメリカの中高校生への日本文化紹介を中心とし、3日間のホームステイ、アメリカ人学生との交流、観光などさまざまなことを体験しました。

大学ではプログラム中に提供する英語を学習し、日本文化紹介に向けての準備をしました。日本文化紹介では学校側との連携がうまく取れず、説明する部分もありましたが、なんとながら進めることができ、説明を終えた際には褒められてとてもうれしい雰囲気となりました。

ほかにもメジャーリーグ観戦をしたり、さまざまな場所を観光しアメリカを満喫でき、思い出深い滞在でした。

家庭科教育講座 遠藤 明日香

私は、アメリカのノーザンケンタッキー大学で3週間の短期留学を経験しました。

メインは現地の中高等学校を訪問し、教育について学び、日本の文化を伝える活動です。中高では姉でダンシングヒーローの練習を行いました。子ども達とても楽しんでくれました。滞在期間中交流で感じたことが本当にたくさんです！

日本とアメリカの教育の違いも学ぶことができ、将来に役立つ学びの機会を通して得ることができました。

社会科教育講座 堀口 桜

私はアメリカのノーザンケンタッキー大学に3週間短期留学を行い、現地の中高等学校に通う生徒たちとの交流を通してアメリカの教育のあり方に触れ、教育について考え直すきっかけを得ることができました。また、ホームステイや体験実習から、アメリカならではの面白い貴重な経験をすることができました。

異なる文化圏での生活は自分にとって良い刺激となり成長できる大きなチャンスです。ぜひこのチャンスを自分の手で掴み取ってみてください。

2. 地域科学部

留学説明会および帰国者との交流会（6月12日）

6月12日に「留学説明会および帰国者との交流会」を開催し、留学を終えて帰国した4年生5名、3年生4名とこれから留学する予定の2年生8名、留学を希望する1年生5名が参加し、留学先での学習や生活、状況などについて交流を行った。留学経験者としてはレイクヘッド大学1名、ノーザンケンタッキー大学2名、サンディエゴ州立大学2名、ユタ州立大学1名、シドニー工科大学2名、マレーシア国民大学1名が参加した。

当日は、まず国際交流委員長より交換留学の概要やスケジュール、語学力向上のためのカリキュラムやサポート体制、奨学金等の留学支援制度についての説明、渡航前の学生を対象にした保健管理センター長の山本真由美先生の講演、その後、留学を経験した国際教養プログラム生が合流し、これから海外留学に出発する学生たちと地域ごとにグループに分かれて意見交換会を行った。海外留学経験者と直接対話することにより、留学への意欲向上につながられただけでなく、海外留学経験者ネットワークの充実にもつながった。



FD 兼留学報告会（11月20日）

11月20日に交換留学を終えて帰国した国際教養プログラム3期生について、学部内での情報共有と、今後留学を希望するプログラム学生への情報提供を目的としてFD 兼留学報告会を実施した。留学から帰国後の国際教養プログラム3期生5名（サンディエゴ州立大学、ノーザンケンタッキー大学、ユタ州立大学、同済大学、グリフィス大学）から留学先での勉学や生活の様子について、実体験を交えて報告された。報告会には教員32名、これから留学する国際教養プログラムの地域科学部の学生4名が参加した。留学経験を学生教員間で共有するとともに、今後留学を考える際に有用な情報提供の機会となった。

シドニー工科大学、グリフィス大学訪問（8月30日－9月2日）

8月30日から9月2日にかけて、神谷教授がオーストラリアの岐阜大学学術交流協定校であり、現在国際教養プログラムの学生が留学をしているシドニー工科大学とグリフィス大学を訪問した。シドニー工科大学では同大学の国際関連オフィスを訪問して、国際事務を担当するKatrina Sandy氏、Sophie Erpicum氏、芸術社会科学部のAkiko Hiratsuka先生、Luke Sharp先生と面談をおこなった。これらを通して同大学への留学を希望する学生達に対して提供すべき有益な情報を得ることができた。引き続いて芸術社会科学における日本語の授業の視察を行った。翌日、留学中の地域科学部の学生3名と面談を行い、大学付近の周囲の視察を行った。これらから留学中の学生の学習状況、生活環境、安全性等を把握できた。ゴールドコーストのグリフィス大学では片山先生と面談を行った。短期プログラムも含めて双方の大学の留学プログラムや最近の近況などの情報交換を行った。さらに地域科学部からの留学生1名と面談、大学構内、図書館、教室、大学内の食堂、大学付近のスーパー等の視察を行った。これらから同大学の学習環境、生活環境、安全性等を把握できた。これらの訪問を通して両大学への留学に対する今後の展望を含めた有益な情報を得ることができた。



3. 医学部・医学系研究科

令和6年度日韓交流会（8月2日－6日）

昨年度より再開した岐阜大学医学部と韓国・忠北大学医学部との学生交流イベントを行なった。今回は忠北大学の学生4名と引率教員の Heu Je Bang 教授および Ji Sun Lee 教授を岐阜大学で迎え入れた。8月2日に中部国際空港に到着した忠北大学一行とともに岐阜大学へ移動して歓迎パーティを行い、両者の親睦を深めた。3日は愛知県にあるジブリパークで日本のアニメ文化体験、名古屋市内観光を行なった。4日は犬山城での観光、岐阜での鵜飼体験を行なった。5日の午前中は岐阜市民病院のご協力の下、病院見学をした。午後は岐阜大学に戻って、韓国と日本の医学教育の違いや文化などについて双方の学生4名ずつによる英語プレゼンテーションを行なった。その日の夜は岐阜の名物、清流長良川の鮎料理を賞味し、フェアウェルパーティで今回の活動の思い出を振り返りあった。翌6日には忠北大学一行を名鉄岐阜駅まで見送り、別れを告げた。来年は岐阜大学の学生が忠北大学を訪問することになる。



ライプチヒ大学（ドイツ）医学部訪問（2025年3月3日－5日）

2025年3月3日にライプチヒ大学医学部スキルス・シミュレーションセンター（LernKlinik Leipzig）の施設訪問と Daisy Rotzoll 教授とのシミュレーション教育に関して懇談をおこなった。Daisy Rotzoll 教授が研究されている、peer assisted learning についてご教授いただいた。

また2025年3月4日～5日に医学部教員向けの医学教育のFD（Hochschullehrenden-Training2025）の見学・一部参加をした。40人ほどの医学部教員が参加したFDで、チームビルディングのためのワークを行ったり、チュートリアルにおけるコミュニケーションの取り方をビデオ教材を用いて討論したりしていた。

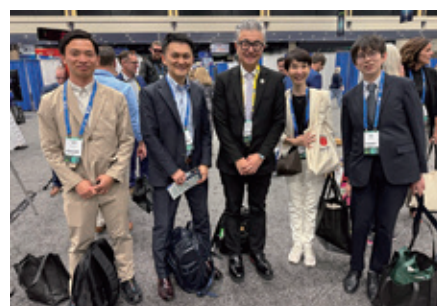


南フロリダ大学訪問、IMSH2025参加（2025年1月8日－13日）

2025年1月8日～10日、MEDC 西城卓也 教授、地域共創型飛騨高山医療者教育学講座 高橋美裕希 特任准教授、鷹羽律紀 特任助教、保健管理センター 山本眞由美 教授、山本容正 客員教授、感染症寄附講座 手塚宜行 教授、地域医療医学センター 平井克城 助教が南フロリダ大学を訪問し、世界最大のシミュレーションセンター CAMLS 等多数の施設を見学、酒井敦子先生に Honors College をご案内いただきました。交流や医療者教育に関して多くのスタッフ・学生皆様と議論することができました。2025年1月11日～13日、医



療者教育チーム（西城・平井・鷹羽・高橋）はオランダに移動し、医療シミュレーションの国際学会 Society for Simulation in Healthcare IMSH 2025に参加しました。南フロリダ大学 Yasuharu Okuda 教授のご指導のもとで医療 Dx と人材育成に関して情報収集しました。また、ランチタイムに同じテーブルに座ってくれたコロラド大学 Simulation Program Manager の Julie Sweum 先生と突如としてネットワークができるという国際学会ならではの奇跡も起こりました。



マギル大学 Kevin Lachapelle 教授による岐阜県講演ツアー（主催：岐阜県医師育成・確保コンソーシアム、共催：地域医療医学センター、MEDC、高山赤十字病院）（11月18日－23日）

11月18日から23日にマギル大学の医学教育者・心臓血管外科医の Kevin Lachapelle 先生をお招きし、岐阜市民病院、岐阜大学医学部附属病院、高山赤十字病院で「より良い臨床教育のためのフィードバック」を中心に据えたテーマで、それぞれの施設ニーズにあわせた講演をしていただきました。多数の岐阜大学医学部医学科の学生、各施設の研修医・若手医師・指導者にご参加いただき、臨床教育を考える良い機会となりました。



Doni Widyandana 准教授の医学教育開発研究センターとの相互交流（11月14日－16日）

かねてから多職種連携を中心とした医療者教育学で医学教育開発研究センターと親交のあったインドネシアの Yogyakarta にある Gadjah Mada 大学医学部の Doni Widyandana 准教授が、医学教育開発研究センターを11月14～16日に表敬訪問した。Doni 博士は、眼科専門医であり、医学教育学の先進校であるオランダのマーストリヒト大学において、修士号を2007年、博士号を2011年に取得され、多職種連携の多数の実践と教育、そして研究に多数の業績を残されている。本学からは、岐阜大学医学部で推進されている多職種連携教育についてご紹介し意見交換が出来た。また1973年の WHO 太平洋地区指導医講習会に日本人として初めて参加された本学公衆衛生学 館正知教授にはじまる岐阜大学の医学教育の系譜と医学教育開発研究センターの歴史をご説明した。また2025年3月には、Gadjah Mada 大学医療者教育学修士課程の Webinar に MEDC の西城卓也教授が参加し、今後の卒前・卒後教育や大学院専門職教育における教員養成や研究における交流の可能性を探る意見交換を行った。



南フロリダ大学学生との交流について（5月13日～16日）

5月13日から16日の4日間、米国の南フロリダ大学よりオナーズ学部・公衆衛生学部の学生39名、教員及び添乗員6名が岐阜大学に来学し、岐阜大学との国際交流が図られた。期間中には、看護学科3年生と南フロリダ大学の学生による共同講義「医療英語Ⅰ」が開講され、看護学科の学生と南フロリダ大学の学生が交流を深めた。

また、看護学科の見学、老年・在宅看護実習室での高齢者の視覚体験や母子看護実習室での実習体験が行われた。ほかにも、武道館での空手、合気道の見学が行われ、南フロリダ大学・岐阜大学の両学生、教員にとって、貴重な経験となった。



看護学科学生が参加した短期海外留学プログラム

看護学科学生は、令和6年度に3つの短期海外留学プログラムに参加した。第1の看護学科短期海外留学プログラムは米国ワシントン大学（ワシントン州シアトル市、9月11日～9月20日）で実施され、看護学科学生3名が参加し、英語レッスンや提携医療・福祉機関での研修を行った。帰国後、12月2日に英語による報告会を開催した。第2のグローバル推進機構のEFN（English for Nursing）プログラムはカナダ・アルバータ大学（2月20日～3月24日）で実施され、看護学科学生2名が参加した。第3の全学英語研修プログラムでは、豪州グリフィス大学 ESL プログラム（8月27日～9月29日）に看護学科学生4名、アルバータ大学 ESL プログラム（8月31日～9月29日）に看護学科学生2名が参加した。



4. 工学部

工学部外国人留学生のための日帰り旅行 One-Day Trip TOUNOU（5月30日）

工学部では、5月30日に外国人留学生のための日帰り旅行 One-Day Trip TOUNOU を企画・実施した。参加者：学生14名（AGP生 M1, M2, 短期特定課題受託研修生含）と、引率者は川瀬真弓（教員）、梅田要恵（GPO 国際スタッフ）が担当した。当日は、8時30分に岐阜大学を出発して核融合科学研究所に向かい、じっくりと施設内を見学した。館内の説明もゆっくりうかがうことができ、日頃見ることができない実験装置などを見学させていただき、大変有意義な時間を過ごせた。その後、土岐市の道の駅（どんぶり会館）にも立ち寄り、地域の特産品などをゆっくり見学することができた。その後、美濃和紙会館へ向かい、全員で紙漉き体験をし、楽しく交流した。



工学部短期留学報告会（2025年2月6日）

2025年2月6日に、JASSO 派遣奨学金による工学部短期留学プログラムの参加者による報告会を実施した。本プログラムは、学部生と自然科学技術研究科の学生を学部間協定校に短期派遣するもので、10年以上継続的に実施されている。学生は各自特定の課題を持ち、受入先大学の研究室に短期滞在し、現地学生と共に研究を行う。本年度は12名がインドネシア、マレーシア、スペイン、東ティモールで研修を実施した。報告会では、現地での研究成果に加え、学生間の交流や異文化に触れて感じた事、留学前後の自身の成長について語られた。報告会はライブでオンライン配信され、動画のアーカイブは、体験者の生の声を伝えるために活用される。



5. 応用生物科学部

海外留学相談会の開催（7月1日）

応用生物科学部では、海外留学促進のため7月1日に海外留学相談会を対面で開催した。

本相談会は、学部、修士、博士学生を対象に毎年開催しており、本年度は各種海外留学奨学金や留学プログラム（ESL 及び EST、JASSO による研究留学、ジョイント・ディグリープログラム（以下、「JDP」という。)) について説明した。また、4名の留学経験者（インド（JDP、スプリングスクールプログラム）、カナダ（EST）、オーストラリア（ESL））との懇談会では、参加者から留学前にすべきことや、留学中に大変だったことなど、多くの質問が寄せられ活発に意見交換を行う姿から、留学に対する関心の高さがうかがえた。

応用生物科学部では、学生にとって海外留学をより身近に感じてもらうために海外留学促進動画も作成しており、今後も学生が様々な留学制度に触れる機会を積極的に設けていく予定である。



留学経験学生
による動画

国際獣医学インターンシップ演習（2025年3月17日－21日）

本演習は、共同獣医学科の選択専門科目として、臨床獣医学に対するグローバルな視点を養い、英語でのコミュニケーション能力を向上させることを目的に毎年開講されている。英国ケンブリッジ大学獣医教育病院の協力を得て実施されており、今年度は5名の学生が参加した。ケンブリッジ大学の獣医学生は、教育病院の各診療科を数週間ごとにローテーションしながら、1年間にわたる臨床実習を経験する。本学の学生は、その一部として希望する診療科の実習プログラムに飛び入り参加した。これまで本学学生が参加できるプログラムは小動物臨床分野の診療科に限定されていたが、今年度は馬診療科や農場動物診療科への参加も新たに認められた。これにより、本演習はケンブリッジ大学版「参加型臨床実習」のエッセンスを凝縮したものとなった。



6. 社会システム経営学環

フエ大学（ベトナム）の学生と観光プランを作成し現地でプラン検証

社会システム経営学環観光デザインプログラムの学生が、ベトナム・フエ大学観光ホスピタリティ学部の学生と共に「日本の若者をフエに誘致する滞在型3日間観光プラン」の提案に向けて、1か月間のオンライングループワークを実施し、現地にてそのプランの検証を行った。

現地実習では、3月6日から15日までの9日間フエ市に滞在し、フエの観光資源を探索するとともに、自ら考案した観光プランを検証した。また滞在中には、フエ省人民委員会および観光局から、同省の観光資源や観光客の動向などについて詳しいご説明をいただいた。

実習の最終日には、両大学の学生が共同でブラッシュアップした観光プランを発表した。国際的な多様性や価値観に触れるとともに、日本国内の観光における課題を振り返る貴重な機会となった。今後も両国間の観光交流がさらに発展していくことを期待している。



7. 連合農学研究科

スブラス・マレット大学と共催で気候変動に関する国際会議を開催 (11月6日－8日)

岐阜大学大学院連合農学研究科（博士課程）は、11月6日から8日までの3日間、インドネシアのスブラス・マレット大学と共催で、「第10回 International Conference on Climate Change 2024」（ICCC: 気候変動に関する国際会議）を開催した。今年は「気候変動、植物、健康」をテーマとして、岐阜大学を会場に対面とオンラインのハイブリッド形式で実施した。

ICCC では、はじめに本研究科の平松研究科長が開会挨拶を行い、その後、環境社会共生体研究センターの村岡教授が気候変動下における長期的森林生態系調査に関する基調講演を実施した。講演では、高山試験地で30年以上にわたり続けられてきた調査をもとに、気候変動が森林生態系に与える影響などを解説した。その他、千家前研究科長や千原前客員教授による招待発表などを実施し、3日間で対面56名、オンラインから66名が参加し、国際的な視点で多様な知見が共有された。

11月6日には、ICCC と並行して、南部アジア農学系博士課程教育連携コンソーシアム（IC-GU12）による「IC-GU12 Roundtable Meeting 2024」（農学系博士教育国際連携円卓会議）が開催された。9カ国21大学から25名のリエゾン教員らが対面・オンラインで出席し、博士課程教育における国際共同学位プログラム（コチュテル・プログラム）の導入について活発な意見交換が行われた。

11月7日には、「UGSAS-GU Poster Presentation on Agricultural Science 2024」（農学分野に関するポスタープレゼンテーション）が行われた。学生28名が自身の研究成果を発表し、来場者による投票で4名が Best Presentation Award（最優秀発表賞）を受賞した。

11月8日には、希望者を対象に高山での施設見学を行った。参加者は2グループに分かれ、環境社会共生研究センター高山試験地と観測タワーを見学し、地域の自然環境を肌で感じながら、研究の現場について学ぶ貴重な機会となった。

本会議は、気候変動という地球規模の課題に対して、多国間で知見を共有し、次世代の研究者を育成する重要なステップとなった。岐阜大学は、今後も国際的な連携を深化させ、持続可能な未来の構築に貢献していく。



8. 保健管理センター

南フロリダ大学との交流

岐阜大学と南フロリダ大学（University of South Florida; 以下、「USF」という。）は2016年に医学部・保健管理センターと部局間協定、2020年に大学間協定を締結した。山本 眞由美 教授（保健管理センター長）は、大学間協定のリエゾンを担当しており、2024年度のUSFとの交流活動を以下にまとめる。

USF 公衆衛生学部学生20人とオナーズカレッジ（教養学部）学生20人が来訪 （5月27日－5月31日）

教職員3人を含む総勢45人が5月27日に岐阜着。翌28日には岐阜城、岐阜大仏、うかいミュージアムなど歴史視察の後、本学医学科学生7人とともに鵜飼観覧船乗船と、学生の交流が深まった。29日は、山本保健管理センター長の講義「日本の医療保険制度について」の後、リムワーク副学長から挨拶と記念品授与、写真撮影、昼食時には邦楽部による琴・尺八・三味線の演奏を聴き、午後は看護学科3年生と医療英語実習の合同講義を実施した。医療英語担当の佐々木 彩子 准教授（医学部看護学科）の指導のもと、看護学生とUSF学生でグループを作り、英語で医療問診を聴取するロールプレイを実践した。その後、看護学科の訪問看護実習室やシミュレーション教育ルームを見学。さらに武道場へ移動して空手部、居合部の練習風景を見学し、USFの学生が飛び入りで空手に参加するなど、日本の伝統的武道がとても印象深いようだった。28日は郡上八幡国際友好協会の支援をうけ、郡上八幡小学校を訪問した。食育の講義を受けた後、給食準備を見学、給食を実際に食べ、掃除も小学生らと一緒に体験。米国ではこのような教育が無いそうで、USFの学生にとっては貴重な体験のようだった。地域のお囃子クラブの協力で、ユネスコ世界無形文化遺産になった郡上踊りにも小学5、6年生と挑戦。皆で踊りが盛り上がった時には、本当に感動的で、USFの学生にとっても郡上八幡の小学生たちにとっても忘れられない思い出になった。さらに、30日には、医学科1年生と将来のライフプランについてグループ討論をする交流講義も実施した。同年代の日本人学生と交流できたことは貴重な体験であったとの感想が多かった。



USF 学生が保健管理センターへ研究留学

USF 公衆衛生学修士2年生の Nicole Nagib 氏が5月14日－7月14日の9週間、Angerica Silvestre 氏は6月24日から7月26日の5週間、堀田 亮 准教授（保健管理センター）の指導の下、研究に打ち込んだ。本学学生のメンタルヘルス調査データの解析に取り組み、この成果を論文としてまとめ、査読付国際学術雑誌に掲載された。（Cogent Psychology,2025. DOI:10.1080/23311908.2025.2498794）

Ⅲ．大学の国際化と学生支援

アドバンスド・グローバル・プログラム（AGP）について

工学部・教授 久米 徹二
応用生物科学部・教授 柳瀬 笑子

1. AGP の概要

2017年工学研究科と応用生物科学研究科が改組・融合して自然科学技術研究科が設立されたのを契機に、研究科のすべての専攻で英語による学位（修士）習得を可能にする学位プログラム、アドバンスド・グローバル・プログラム（AGP）が設置された。英語で開講される講義はもとより、修士論文の執筆・発表も英語にて行われる。AGP に所属する多くの学生は留学生であるが、日本人学生も所属することが可能であり、留学生と日本人学生が同じ講義を英語で受けている。

カリキュラムは、英語で実施される AGP 系科目の他、一般専攻と合同で実施される講義がある。合同で開講される科目では、英語のみあるいは英日併用の講義資料が提供されるケースが大半である。また教員側は、英語を分かりやすく話す、内容を簡略化するなどの工夫をしており、日本人学生及び留学生の双方に配慮した講義が提供されている。令和3年度に行った AGP 学生向けのアンケートにおいても、講義全体に対して概ね好意的な評価が寄せられた。一方で、AGP 学生向けに開講されている講義数が限られていることから、必ずしも自身の専門分野に適した科目を選択できず、専門外の講義を履修せざるを得ない状況も見受けられる。こうした場合には、内容理解の難しさや、英語対応が不十分であるといった課題が指摘されており、今後、カリキュラム構成や支援体制の見直しが求められる。

AGP に特有の必修科目として「グローバルインターンシップ」が設けられており、留学生は国内の企業や研究機関でのインターンシップ（例：近隣の一般企業のほか、岐阜県食品科学研究所、岐阜県公衆衛生検査センター等）を、日本人学生は海外でのインターンシップや研究留学（通常1～2か月の短期留学）を経験する。これらは、留学生にとっては日本企業を理解する貴重な機会であり、日本人学生にとっては国際感覚を養う絶好の機会である。しかしながら、企業側にとっては英語で10日間にわたって学生を受け入れることは負担が大きく、結果として受入先が限定的となっているのが現状である。このため、英語対応が可能な受入先の確保が重要な課題となっており、今後さらなる受入先企業の開拓と協力体制の整備が求められる。

AGP は工学研究科と応用生物科学研究科それぞれにあった英語プログラムが統合された経緯から、必要単位数などカリキュラムの根幹は共通であるが、工学系、応生系で独自性を保っている部分もあるため、以下に分けて記述する。



2. 工学系 AGP

工学系 AGP に在籍する留学生は、通常の大学院入試に合格した私費留学生のほか、国費あるいは JICA 支援によるプログラムなどの各種プログラムを通じて入学した留学生が含まれる。その他に工学系 AGP 独自の私費留学生の受入れとして協定大学推薦がある。リエゾンを通じて各協定大学あたり 1 名の学生を推薦してもらい、本学教員との研究マッチング、オンライン面談などの審査を行って受入れの可否の決定を行っている。日本人学生については、通常の大学院入試に合格した後、英語能力に応じて AGP への入学が認められる。AGP への入学機会は、日本人学生については通常の 4 月のみであるが、留学生はそれに加え秋入学（10月）も可能である。AGP 学生のひと学年当たりの在籍者数は、例年留学生が10名程度、日本人学生が5名程度で推移している。

2017年以来、これまでに70名の留学生と30名の日本人学生が本プログラムで修士号を取得した。留学生の出身国はインドネシア、ミャンマー、マレーシア、東ティモールなどの東南アジアの国が多く合計17カ国にもなる。修士課程修了後、多くの留学生は本学工学研究科博士課程に進学し、学位を取得後、本国に戻り教員や技術者・研究者を志す者が多い。すでにそれぞれの分野で活躍している者も多く、彼らは近い将来日本とアジアの国々の架け橋になることが期待される。彼らの活躍はそれらの国々での日本ならびに本学の地位向上に大きく貢献することであろう。

3. 応生系 AGP

応生系では、かつての応用生物科学研究科（2017年まで）において英語特別プログラムを通じて積極的に留学生を受け入れてきた。2017年の大学院改組により自然科学技術研究科へ再編された後は、工学部と連携し、AGP を実施することで、引き続き海外からの学生を受け入れている。

受入学生数は年度によって変動するが、例年5～10名程度である。入学時期は年2回、春期（4月）と秋期（10月）に分かれており、春期は8月に実施される大学院入試合格者の中で希望する者が入学する。秋期は、6月下旬に実施される AGP 入試に合格した学生が対象となっている。学生の多くは留学生であり、一般の私費留学生に加えて、国費留学生や JICA などの各種プログラムを通じて来日している。国籍は、インドネシアや中国など東アジアの地域からの留学生が中心であるが、中にはガーナやセネガルなどアフリカ地域からの学生も在籍しており、多様性に富んでいる。また、近年では、国際的な環境での学びを志す日本人学生も本プログラムに入学している。

令和7年4月時点で、AGP プログラムの修了者は累計40名に達している。修了した留学生の多くは、引き続き連合農学研究科博士課程へと進学し、日本人学生は一般企業への就職を選択している。国際化が急速に進む現代の世の中で、本プログラムで学んだ学生がそれぞれの進路先で国際的な広い視野を持った人材として活躍してくれることを望んでいる。



地域科学部国際教養プログラム

地域科学部・教授 和佐田 裕昭

地域科学部には「国際教養プログラム」と名付けられた教育プログラムがあります。このプログラムに参加する学部学生が海外の協定大学へ留学することに象徴されたものです。

国際教養プログラムは、2016年開設の国際教養コースの発展形です。なぜ地域科学部に国際を冠を持った教育プログラムが設けられたのでしょうか。地域科学部すなわち岐阜地域 or 濃尾平野周辺 or 中部地方 etc. を対象とした研究と教育の学部といったような、いまだにままだ散見される観点からはとても奇異に思われるかも知れません。しかし、地域科学部をわずかでも覗いていただければお分かりになるように、地域科学部は国際を意識した教育と研究をずっと実施してきたのです。例えば、応用外国語です。この専門科目群では、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮・韓国語が、そして英語が教授されます。地域科学部設立当初はロシア語すら教授されていました。アメリカ籍、フランス籍、中国籍など、海外諸国からの研究者をスタッフに擁してきました。そもそものこのような国際的な雰囲気の中で発展してきた地域科学部でしたが、1996年の学部創設から20年ほど経過すると、地域そのものの変化に対応しようとの機運が高まってきました。ちょっとみなさんの周りを見まわしてみてください。20世紀末とは比較にならないほど国際化していることに気づかれるのではないのでしょうか。このような変化にも対応するために、国際的な視野を持ちつつ地域社会に向き合って課題の解決策を提案できる能力を育成したいと考え、2014年から2016年にかけて前後13回にも渡る設置準備委員会での激しい議論ならびに教授会での審議を経て、2016年4月に国際教養コースを設置しました。国際教養コースが育てたいと考えた人物像は「人文科学から自然科学にわたる幅広いリベラル・アーツ的学識と自文化と異文化に関する学識を積極的に学習したうえで、光もあれば影のあるグローバル化した現代社会を相対的に理解し、色々な課題に取り組むことができる」というものです。ここで謳う「光もあれば影のあるグローバル化した現代社会を相対的に理解」は、昨今のさまざまな国際的な出来事を振り返るにつけ、あまりにも示唆的であり時代の流れを掴んでいたとしみじみ思えてなりません。

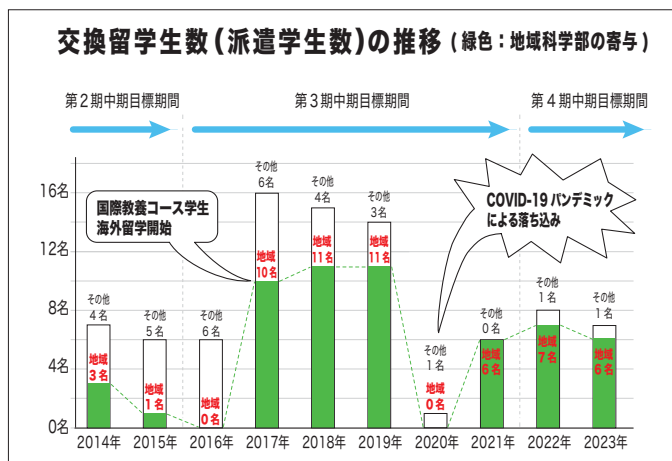
2017年に学部2年生となった国際教養コースの初代学生が海外留学へと出発したことは、国際教養コースが岐阜大学全体の傾向に与えた劇的な変化をついに顕在化させました。交換留学生数（派遣学生数）の推移は、これがまさに爆発的な変化ですらあったことをまざまざと示しています。

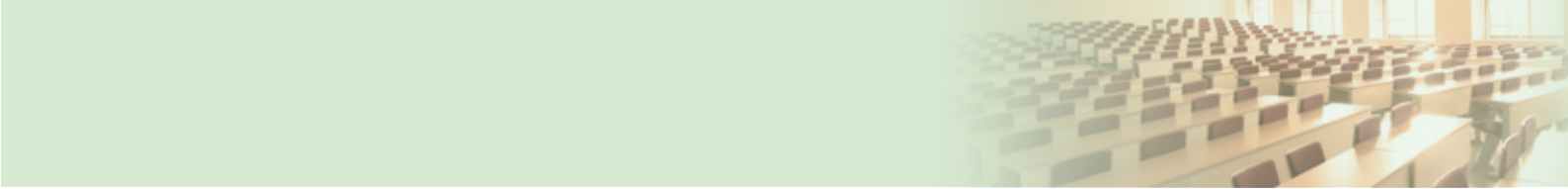
その後、COVID-19パンデミックまでは、国際教養コースは順調な経過をたどりました。そこで、地域科学部地域文化学科所属の学生が参加できた国際教養コースを社会科学系や自然科学系を専攻する学生にも対象を広げることになりました。これが現在展開されている国際教養プログラムです。これにより、地域科学部で学ぶすべての学生が国際的な視野の獲得にチャレンジできるようになりました。

国際教養プログラムでの学習の流れをざっと見てみたいと思います。地域科学部に入学した学生のなかで、国際教養プログラムを希望する人たちは、いまや現代人にとっての必須の素養ですらある数学系の専門科目から始まり、近・現代思想論や日本経済論のような人文社会系の専門科目、物理学や化学実験のような自然科学系の専門科目までと、幅広く選択履修することが義務づけられます。地域科学部では文理横断的なカリキュラムが展開されているのですが、国際教養プログラムでは文理に渡る分野横断的な学習が一層徹底され

岐阜大学の国際化を先導

地域科学部 国際教養プログラム





ています。この横の幅広さに加えて、各学生が専門とする分野の履修系統科目と専門セミナーの履修によって専門分野の知識と技能をさらに高め、卒業研究へと向かいます。このような学習の流れのなかで、2年生後学期から3年生前学期の1年間、岐阜大学と学術交流協定（または地域科学部と学部間協定）を締結している海外の大学へ留学する仕組みとなっています。

地域科学部が考える国際教養プログラムでの留学は「語学研修」ではありません。留学先では、その国の言葉で学生各人の専門に関わる科目を学びます。もちろん、1年に渡る海外生活を経れば、語学能力の飛躍が予想されるのは当然のことではありますが、地域科学部が求めているものはここではありません。留学を認められる最低限の言葉の基準を満たした程度では、留学先での専門科目の授業について行くのも青息吐息というのは想定内です。しかし、「門より入るものはこれ家珍にあらず」ではないですが、留学先での専門の授業がもたらす困難を乗り越えるなかで、国際化した地域の諸問題に対処するための自信と指針を学生自身の中に見つけてくれることを私たちは期待しているのです。このため、国際教養プログラムを希望する学生には、地域科学部入学直後から留学希望先大学が求める言語に関する最低基準をクリアするための自主練習を開始するように指導しています。通常の授業だけではまったく足りないことは明らかです。2年生後期からの海外留学には、1年生後学期開始前には最低基準をクリアせねばならず、たった半年の猶予しかありません。地域科学部では言語と社会などの国際教養プログラム関係の諸科目の中では、言語の学習に関するアドバイスや留学したい国の情報が得られるように配慮しています。さらに、国際交流委員会は、学生からの相談に応じるとともに、各種の説明会を随時実施して留学準備や海外での安全対策などに関する情報提供をしています。長期の海外滞在経験のある教員による個別相談も必要に応じて行なっています。加えて、夜間および休日にも利用可能な語学演習室を設置、学生たちが語学能力を高めるための環境を整備してあります。利用可能な教材（貸出も可）は英語関係で約90種類、ドイツ語関係で約30種類、中国語関係で約20種類など、合計170種類以上にのぼります。

言葉に関する最低条件をクリアし、さらに地域科学部ならびに岐阜大学全体での選考を通過した学生は、勇躍海外へと向かいます。日本とは全く異なる環境の中で彼らが発揮する能力に驚かされることもあります。留学状況を視察するためにアメリカのある大学を訪問した際のことでした。その学生のことは化学実験の授業の中で留学前から見知っていましたが、そのときの感じでは、海外生活は大丈夫かなあと少し不安を抱かせるものがありました。しかし、まったくの杞憂でした。アメリカでは、ドーモトリー全体のリーダーになっていたのです。これにはとても驚きました。高いリーダーシップが日本国内では隠れていたに過ぎなかったのです。このように、隠れた資質に気付かされるのも海外留学の醍醐味のひとつなんだと再認識した次第です。

2016年の国際教養コースの開設以来、現在までに合計62名（本年度出発予定者を含む）の学生が、オーストラリア、カナダ、中華人民共和国、フランス、ドイツ、大韓民国、マレーシア、アメリカ合衆国の協定大学への留学を達成しました。帰国後は原所属の専門セミナーで卒業研究につながる指導を受けます。ここでは国際教養プログラムに参加しなかった学生と日々一緒ですので、海外留学によって得たグローバルな視点、日々のセミナー活動を通じて留学経験のない学生達にも伝わるのが期待されます。これも地域科学部が意図していることです。

COVID-19パンデミックは国際教養プログラムにも深刻な打撃を与え、一部のオンラインプログラムを除いてほぼ全面停止せざるを得ない状況に追い込まれました。しかし、その後、状況の改善にともない、順次学生の海外派遣を再開して現在に至っています。

元学長の森秀樹先生、前学長の森脇久隆先生、現学長の吉田和弘先生、歴代の岐阜大学執行部の皆様からは国際教養コース検討の段階から種々ご指導頂くとともに、国際教養コース開設後は留学に出発する学生たちへのご激励、学生たちの自主学習のための教材準備をはじめとする各種事柄へのご援助を賜ってまいりました。日本語・日本文化教育センターならびにグローバル推進機構の皆様からは、日本文化に関する素養醸成や留学手続きをはじめとして色々な事柄でご指導を頂いております。地域科学部の先生方、国際交流委員会の皆様、学務係をはじめとする地域科学部事務部の皆様には、学生指導から始まりあらゆる関係庶務に至るまで日々お世話になり続けています。地域科学部国際教養プログラムは、これらの皆様の全面的なご指導とご援助の賜物です。心から感謝を申し上げます。

1. 令和6年度 グローカル推進機構名簿

所 属 ・ 職 名 等	氏 名	運 営 委 員 会	奨 学 金 等 選 考 委 員 会	部 門				国 際 企 画 部 門 W G	年 報	H P	短 期 派 遣 チーム	短 期 受 入 チーム	愛 岐 留 学 生 就 職 支 援 コ ン シ ー ア ム プ ロ ジ ェ ク ト チーム	J D シ ン ボ ジ ウ ム W G	任 期
				国 際 協 働 教 育 推 進 部 門	地 域 国 際 化 推 進 部 門	留 学 推 進 部 門	国 際 企 画 部 門								
副学長（国際・情報・評価（副）担当）	リム リーワ	○												◎	6.4～8.3
グローバル推進機構機構長	小山 博之	◎	○										○		6.4～8.3
グローバル推進機構副機構長（日本語・日本文化教育センター長）	橋本 慎吾	○	◎										○		6.4～8.3
グローバル推進機構・助教	松井 真弓	○		○	○	○	○	○	○	◎		○			6.4～8.3
グローバル推進機構・特任教授	三輪 真一	○		○	○								○	○	6.4～7.3
グローバル推進機構・特任助教	グレッグ リチャード トルバ	○		○		○					○	○			6.4～7.3
グローバル推進機構・フェロー	柴田 大輔				○									○	－
グローバル推進機構・客員教授	青木 哲史				○								○	○	－
日本語・日本文化教育センター・教授	土谷 桃子	○				○						○			6.4～8.3
日本語・日本文化教育センター・教授	吉成 祐子						○			○					－
日本語・日本文化教育センター・助教	松尾 憲暁				○								○		－
国際事業課長	古田 知美	○	○	○	○		◎	◎	○	○			○	○	5.4～7.3
国際総務室長	加藤 洋平	○		○	○		○	○						○	5.4～7.3
留学支援室長	野村 友里	○			○	○	○	○					○		5.4～7.3
教育学部・教授	巽 徹	○				○					◎				6.4～8.3
教育学部・教授	仲 潔					○					○				5.4～7.3
教育学部・助教	林 日佳理					○					○				5.4～7.3
地域科学部・教授	笠井 千勢					○					○				5.4～7.3
地域科学部・教授	合掌 顕						○								5.4～7.3
地域科学部・教授	神谷 宗明	○				○					○				6.4～8.3
医学系研究科・医学部・教授	千田 隆夫	○					○								5.4～7.3
医学系研究科・医学部・助教	山川 路代			○											5.4～7.3
医学教育開発研究センター・併任講師	今福輪太郎			○		○						○			5.4～6.12
医学部・看護学科・准教授	久我原朋子	○													6.4～7.3
工学部・教授	嶋 陸宏	○	○	○		◎					○	○			6.4～8.3
工学部・教授	久米 徹二	○		○	○		○			○				○	6.4～8.3
工学部・教授	伊藤 聡			○											5.4～7.3
工学部・教授	伊藤 貴司			○											5.4～7.3
工学部・教授	王 道洪			○											5.4～7.3
工学部・教授	小宮山正治			○											5.4～7.3
工学部・教授	高橋 周平			○											5.4～7.3
工学部・教授	杳水 祥一			○	○										5.4～7.3
工学部・教授	上宮 成之			○											5.4～7.3
工学部・教授	海老原昌弘			○											5.4～7.3
工学部・教授	加藤 邦人			○											5.4～7.3
工学部・教授	額 守			○											5.4～7.3
工学部・教授	武野 明義			○											5.4～7.3
工学部・教授	伴 隆幸			○											5.4～7.3
工学部・教授	杉浦 隆						○								5.4～7.3
工学部・教授	伊藤 和晃			○											5.4～7.3



所 属 ・ 職 名 等	氏名	運営委員会	奨学金等選考委員会	部 門				国際企画部門WG	年 報	H P	短期派遣チーム	短期受入チーム	愛媛留学生就職支援コンソーシアムプロジェクトチーム	JDシンポジウムWG	任 期
				国際協働教育推進部門	地域国際化推進部門	留学推進部門	国際企画部門								
工学部・教授	山下 実			○											54～73
工学部・教授	小林 信介			○	○									○	64～83
工学部・教授	岡 夏央			○											54～73
工学部・教授	新田 高洋			○		○						○			64～83
工学部・教授	毛利 哲也	○				○	○	○				◎			64～83
工学部・特任教授	村井 利昭			○											54～73
工学部・准教授	高橋 康宏			○											54～73
工学部・特任教授	木下 幸治				○	○					○			○	54～73
工学部・准教授	小島 悠揮					○						○			54～73
工学部・准教授	高井 千加			○											54～73
工学部・准教授	山田 啓介			○											54～73
工学部・准教授	佐野 栄俊			○											54～73
工学部・助教	須網 暁			○											64～83
応用生物科学部・教授	海老原章郎	○		○	◎								◎	○	64～83
応用生物科学部・教授	西津 貴久			○	○		○								54～73
応用生物科学部・教授	上野 義仁			○											54～73
応用生物科学部・教授	石田 秀治			○											54～73
応用生物科学部・教授	矢部 富雄			○											54～73
応用生物科学部・教授	中川 智行			○			○		◎						54～73
応用生物科学部・教授	柳瀬 笑子	○		◎	○									○	64～83
応用生物科学部・教授	山本 義治			○											54～73
応用生物科学部・准教授	小林佑理子			○		○					○				54～73
応用生物科学部・准教授	島田 昌也			○	○										54～73
応用生物科学部・教授	清水 将文			○	○										54～73
応用生物科学部・准教授	鈴木 史朗				○									○	64～83
応用生物科学部・准教授	勝野那嘉子			○											54～73
応用生物科学部・准教授	北口 公司			○											54～73
応用生物科学部・准教授	今泉 鉄平			○	○										54～73
応用生物科学部・准教授	広田 勲					○						○			54～73
応用生物科学部・准教授	山内 恒生			○		○						○			64～83
応用生物科学部・助教	橋本 美涼			○											54～73
社会システム経営学環・准教授	森部 絢嗣	○													54～73
社会システム経営学環・助教	川瀬 真弓					○					○				54～73
共同獣医学研究科・教授	志水 泰武	○													54～73
連合農学研究科・教授	中野 浩平	○		○											54～73
連合創薬医療情報研究科・准教授	古山 浩子	○													54～73
地域協学センター・准教授	大宮 康一			○	○										64～83
高等研究院・准教授	尾関 智恵						○	○							64～83
高等研究院・准教授	小山 真紀	○													54～73
人事企画課主幹	後藤 康之						○								54～73
教務課長	有川 美香						○								54～73
学務部長	野々村晴子	○												○	64～83

所 属 ・ 職 名 等	氏 名	運 営 委 員 会	奨 学 金 等 選 考 委 員 会	部 門				国 際 企 画 部 門 W G	年 報	H P	短 期 派 遣 チーム	短 期 受 入 チーム	愛 知 留 学 生 就 職 支 援 コ ン ソー シ ャ ム プ ロ ジ ェ ク ト チーム	J D シ ン ポ ジ ウ ム W G	任 期
				国 際 協 働 教 育 推 進 部 門	地 域 国 際 化 推 進 部 門	留 学 推 進 部 門	国 際 企 画 部 門								
国際総務室国際総務係	前田 浩輔			○	○		○	○	○	○				○	
	奈良 友香														
留学支援室留学支援係	岡本 竜太		○		○	○	○	○			○	○	○		
	山田美菜子														
	小林 拓哉														

※グローバル推進機構長、委員長、部門長、専攻長、リーダーは◎

2. 協定一覧

●大学間協定（20ヵ国51大学）

2025年3月31日現在

	大学・機関名	国・地域名	協定締結日	授業料相互 不徴収	交換可能 学生数*
1	カンピーナス大学	ブラジル	1984.8.27	有	2
2	サンディエゴ州立大学	米国	1985.5.7	有	2**
3	浙江大学	中国	1986.4.21	有	3
4	広西大学	中国	1986.4.24	有	4
5	電子科技大学	中国	1986.7.21	有	2
6	江南大学	中国	1986.9.3	有	3
7	ノーザンケンタッキー大学	米国	1990.9.26	有	2
8	ソウル科学技術大学校	韓国	1992.3.19	有	3
9	グリフィス大学	オーストラリア	1995.3.3	有	4
10	ユタ州立大学	米国	1997.5.29	有	2
11	ハノイ工科大学	ベトナム	1998.6.26	有	2
12	カセサート大学	タイ	1999.8.5	有	3
13	内蒙古農業大学	中国	2000.8.8	有	2
14	シドニー工科大学	オーストラリア	2000.8.14	有	3
15	パンノン大学	ハンガリー	2001.3.2	有	3
16	アングラス大学	インドネシア	2001.4.23	有	4
17	バングラデシュ農業大学	バングラデシュ	2001.8.23	有	2
18	エルフルト大学	ドイツ	2002.12.4	有	3
19	吉林大学	中国	2003.5.20	有	4
20	チェンマイ大学	タイ	2003.8.4	有	3
21	ダッカ大学	バングラデシュ	2004.6.17	有	3
22	キングモンクット工科大学トンブリ校	タイ	2005.1.10	有	3
23	華僑大学	中国	2005.3.29	有	3
24	同済大学	中国	2006.3.16	有	2
25	ランボン大学	インドネシア	2006.4.25	有	2
26	内蒙古大学	中国	2007.2.6	有	1
27	バイロイト大学	ドイツ	2008.8.22	有	4
28	ベンハー大学	エジプト	2009.3.18	有	2
29	高麗大学校	韓国	2010.1.15	有	2
30	カウナス工科大学	リトアニア	2010.3.8	有	4
31	ボゴール農科大学	インドネシア	2010.12.2	有	3



	大学・機関名	国・地域名	協定締結日	授業料相互 不徴収	交換可能 学生数*
32	内蒙古師範大学	中国	2011.6.8	有	2
33	ヴィータウタス・マグヌス大学	リトアニア	2012.1.19	有	2
34	ガジャマダ大学	インドネシア	2012.9.13	有	3
35	スブラス・マレット大学	インドネシア	2013.7.8	有	3
36	パリ・サクレ大学	フランス	2014.12.16	有	3
37	インド工科大学グワハティ校	インド	2014.9.21	有	3
38	マレーシア国民大学	マレーシア	2016.9.21	有	2
39	マギル大学	カナダ	2017.3.8	無	－
40	アルバータ大学	カナダ	2017.3.21	無	－
41	レイクヘッド大学	カナダ	2017.10.11	有	2
42	マリアノ・マルコス州立大学	フィリピン	2018.9.10	有	2
43	フエ大学	ベトナム	2018.11.12	有	2
44	アッサム大学	インド	2018.11.20	有	2
45	サラマンカ大学	スペイン	2018.11.26	有	2
46	リール大学	フランス	2020.4.2	有	4
47	南フロリダ大学	米国	2020.12.15	無	－
48	ブラヴィジャヤ大学	インドネシア	2021.2.23	有	2
49	バンドン工科大学	インドネシア	2022.09.26	有	3
50	ラバト国際大学	モロッコ	2024.7.8	有	2
51	シーナカリンウィロート大学	タイ	2025.3.27	有	2

※毎年、1学年度の間に派遣または受入可能な最大限の人数を表しています。 ※※1年2名、半期4名

●部局間協定（26ヵ国1地域65学部）

2025年3月31日現在

協定部局	協定大学等名	国名	初回締結日	授業料相 互不徴収	交流対象者
教育学部	カールスルーエ教育大学	ドイツ	2015.10.21	有	学生・教員
	山西師範大学	中国	2015.12.7	有	学生・教員
地域科学部	アーカンソー大学フォートスミス校	米国	2015.6.8	有	学生・教員
	国立中央大学文学院	台湾	2021.1.14	有	学生・教員
医学部	浙江大学医学院	中国	2000.12.4	有	学生・教員
	コンケン大学医学部	タイ	2000.12.18	有	学生・教員
	忠北大学校医学部	韓国	2009.4.17	有	学生・教員
	ハワイ大学医学部	米国	2016.8.24	有	学生・教員
	ソウル大学校医科大学	韓国	2019.4.11	無	学生・教員
	シカゴ大学医学部	米国	2019.6.3	無	学生・教員
医学部・保健管理センター	南フロリダ大学医学学群	米国	2016.10.20	無 ^{※1}	教員 ^{※2}
工学部	全南大学校工学部	韓国	2002.2.6	有	学生・教員
	柳韓大学校工学系列	韓国	2010.9.29	有	学生・教員
	ベンクル大学数学自然科学部	インドネシア	2011.7.20	有	学生・教員
	サー・パラシュラムプ・カレッジ	インド	2012.9.17	有	学生・教員
	忠南大学校工学部	韓国	2013.1.18	有	学生・教員
	マドリッド・カルロス三世大学工学部	スペイン	2013.7.9	有	学生・教員
	ドルトムント工科大学機械工学部	ドイツ	2014.6.23	有	学生・教員
	マンダレー大学自然科学系学部	ミャンマー	2014.8.25	有	学生・教員
	ヤダナボン大学自然科学系学部	ミャンマー	2014.12.16	有	学生・教員
	メティラ大学自然科学系学部	ミャンマー	2014.12.16	有	学生・教員
	デダンキマティ工科大学工学部	ケニア	2014.12.16	有	学生・教員

協定部局	協定大学等名	国名	初回締結日	授業料相互不徴収	交流対象者
工学部	トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学理工学部	マレーシア	2014.12.16	有	学生・教員
	慶北大学校工学部	韓国	2015.2.27	有	学生・教員
	アメリカ国立衛生研究所・国立心肺血液研究所	米国	2015.3.18	有	学生・教員
	バーデン・ヴェルテンベルク州立太陽エネルギー・水素研究センター	ドイツ	2015.3.20	無	学生・教員
	ブンハッタ大学	インドネシア	2015.7.30	有	学生・教員
	パダン州立大学数学自然科学部	インドネシア	2015.9.18	有	学生・教員
	クラクフ工科大学環境電力工学部	ポーランド	2015.11.30	有	学生・教員
	チュラロンコン大学理学部	タイ	2015.12.2	有	学生・教員
	南京師範大学 エネルギー機械工学院	中国	2017.7.17	有	学生・教員
	ダゴン大学自然科学系学部	ミャンマー	2017.7.21	有	学生・教員
	インドネシア・イスラム大学土木工学・計画学部、数学・自然科学部	インドネシア	2018.2.23	無	学生・教員
	ブルネイ・ダルサラーム大学理学部	ブルネイ・ダルサラーム	2018.6.15	有	学生・教員
	ザンビア大学工学部	ザンビア	2019.1.30	有	学生・教員
	リアオ大学教員養成・教育学部	インドネシア	2020.3.3	無	教員
	長庚大学工学部	台湾	2020.3.18	有	学生・教員
	タイ国立電子コンピューター技術研究センター	タイ	2023.1.29	無	教員
	ジョモケニヤッタ農工大学	ケニア	2023.8.1	有	学生・教員
工学部・地方創生エネルギーシステム研究センター	東ティモール国立大学工学部	東ティモール	2016.8.29	有	学生・教員
インフラマネジメント技術研究センター	中国科学院水利部水土保持研究所	中国	2008.8.12	無	教員
	中国水利水電科学研究院岩土工程研究所	中国	2009.7.24	無	教員
応用生物科学部	チュラロンコン大学理学部	タイ	1994.3.15	無	学生・教員
	コンケン大学農学部	タイ	2000.3.27	無	学生・教員
	コンケン大学学部間共同開発研究所	タイ	2000.3.27	無	学生・教員
	国立獣医科学検疫院獣医科学研究所	韓国	2008.11.4	無	教員
	モンゴル国立大学地理地質学部	モンゴル	2012.10.29	無	教員
	ガーナ大学基礎応用科学部	ガーナ	2015.8.20	無	教員
	ラジシャヒ大学農学部	バングラデシュ	2016.12.27	無	教員
	南太平洋大学自然科学・工学・環境学群	フィジー	2017.12.1	無	教員
	カザン連邦大学環境科学部	ロシア	2018.5.18	無	教員
	カザン医学アカデミー	ロシア	2018.12.10	無	教員
	ハンガリー科学アカデミー農学研究センター	ハンガリー	2018.12.10	無	学生・教員
連合農学研究科	チュラロンコン大学理学部	タイ	2012.12.6	有	学生・教員
	チュイロイ大学	ベトナム	2015.6.25	有	学生・教員
	ラオス国立大学林学部	ラオス	2018.3.21	有	学生・教員
	キングモンクット工科大学ラカバン校産業教育学部	タイ	2023.8.9	有	学生・教員
	ラジャスタン大学生命科学研究科	インド	2024.6.27	有	学生・教員
連合獣医学研究科・共同獣医学研究科	ガーナ大学基礎応用科学部	ガーナ	2015.8.20	無	教員
連合創薬医療情報研究科	カフル・エル・シェイク大学獣医学部	エジプト	2009.11.15	有	学生・教員
	タイビン医科薬科大学医・薬科学技術センター	ベトナム	2020.3.31	無	学生・教員
	トリノ大学	イタリア	2025.3.18	有	学生・教員
複合材料研究センター	EMC 2 クラスター・IRT ジュール・ヴェルヌ	フランス	2014.3.13	無	学生・教員
地域連携スマート金型技術研究センター	台湾国立高雄科技大学先端金型研究開発センター	台湾	2019.12.27	無	学生・教員
科学研究基盤センター	タイビン医科薬科大学医・薬科学技術センター	ベトナム	2020.3.31	無	教員

※ 1, 2 南フロリダ大学との「医療従事者交流プログラム」においては、授業料等相互不徴収：有、交流対象者：学生・教員



3. 本学の国際関連活動

●学長表敬訪問（来訪）

日付	国・地域	訪問者	目的
6月3日	ジョージア (駐日ジョージア大使館)	ティムラズ・レジャバ駐日ジョージア特命全権大使	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
7月8日	モロッコ (ラバト国際大学)	ヌレディン・ムアディブ学長、アブデルアジズ・ベンジュアード副学長(研究・イノベーション・パートナーシップ担当)、アブデラティフ・ベンチェリファ学長シニアアドバイザー・公共政策センター部長、モフシン・ボウヤイノベーション・起業家育成センター担当総括部長、ジャマル・ブコウレイ部長(国際関係・パートナーシップ担当)、ナディア・ユースフィ・シュタイナー教授、アオマール・ブーム研究者	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換、大学間学術交流協定書への署名式
7月17日	タイ (シーナカリンウィロート大学)	ソムチャイ・サントイワタナクンル学長、パンシリ・パンスワン 副学長(学務担当)、スパセツリ副学長(国際関係・コミュニケーション担当)、チョルウィット・ジェアラジット副学長(計画・社会戦略担当)、プーム・ムルシルパ社会科学部学部長、チョティピット・タムスジットSWU パトゥムワン実地学校校長、タンニカーン・スーンシンパイ学務・国際関係副学部長、ハタイラット・マープラニット社会科学学科長、クリッティヤ・カンタチョート社会管理学博士課程委員、ペンブン・タムスジット学生指導員、学生16名	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
10月18日	インドネシア (アンダラス大学)	エファ・ヨンネディ学長、シュクリ・アリフ副学長I(教育・学生支援担当)、エリザル・ムチタル生物学プログラム専攻長	表敬あいさつ、新学長からの挨拶、国際交流に関する意見交換
10月29日	リトアニア (駐日リトアニア大使館)	オーレリウス・ジーカス駐日リトアニア共和国特命全権大使	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
12月2日	アメリカ (名古屋米国領事館)	アンナ・ワン首席領事	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
12月20日	インド (駐日インド大使館)	シビ・ジョージ 駐日インド共和国特命全権大使、ウディタ・ガウラヴ駐日インド大使館一等書記官、チョン・ミヘン駐日インド大使館職員	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
2025年 1月29日	リトアニア (ヴィータウタスマグヌス大学)	アルヴィタス・クンピス アジア研究センター所長、シモナ・クンベ アジア研究センター研究員	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
2025年 3月27日	タイ (シーナカリンウィロート大学)	チョルウィット・ジェアラジット学長(代行)、プーム・ムルシルパ社会科学部学部長、サイチョル・パニヤチット学長補佐(特別業務担当)、タンニカーン・スーンシンパイ学務・国際関係副学部長、ハタイラット・マープラニット社会科学学科長、パイルチャ・ボルヴォンサンボン社会マネジメントプログラム委員、クリッティヤ・カンタチョート社会マネジメントプログラム委員、ポーンペン・トライフォン法学プログラム委員、ベンジャワン・タマラット法学プログラム委員	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換、大学間学術交流協定書への署名式
2025年 3月28日	ザンビア (ザンビア大学)	ムンディア・ムヤ学長、ケネディ・ングウェンデ・ムササ副学長補佐、ズル・ビクター・チシャ獣医学部長、カリバ・チャボタ工学部講師	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換

●学長表敬訪問（往訪）

日付	国・地域	訪問先	目的
7月19日-7月21日	ウズベキスタン	サマルカンド国立医科大学	意向表明書締結のため
9月5日-9月7日	フランス	リール大学	部局間学術交流協定(ダブル・ディグリー)の締結のため
9月7日-9月9日	リトアニア	ヴィータウタスマグヌス大学	部局間学術交流協定(ダブル・ディグリー)の締結のため

●ハイブリッド形式での交流

日付	国・地域	目的	学長メッセージ動画
2025年 3月3日-5日	インド (ハイブリッド形式)	インド工科大学グワハティ校 (IITG) とグワハティ ジョイント・ディグリー シンポジウム2025	

●令和6年度国際関連事業一覧

令和7年3月31日現在

開始	終了	名称	参加人数	主催
4月4日		JDP コンソーシアム竹資源利用勉強会	46	グロ
4月17日		新規渡日留学生オリエンテーション	24	グロ
4月22日		サマースクール（派遣）説明会	91	グロ
4月24日		海外留学フェア2024春	110	グロ
4月25日		EU 加盟20周年レセプション	1	EU
4月30日		国際交流会館ウェルカムパーティ春	37	グロ
5月9日		Meet up Chubu	255	グロ / 中部経済産業局
5月22日		CVMP 学内説明会	4	グロ
5月28日		リトアニア勉強会	19	グロ
5月29日		郡上踊りワークショップ	28	日文
6月3日		駐日ジョージア大使学長表敬	4	グロ
6月12日		サマースクール（派遣）事前研修（第1回）	37	グロ
6月19日		サマースクール（派遣）事前研修（第2回）	36	グロ
6月19日	7月17日	岐阜大学サマースクール2024	9	グロ
6月24日		UOW College Hong Kong 代表団岐阜大学訪問	約100	グロ
6月25日		リトアニア勉強会	14	グロ
6月26日		羽島市国際交流協会ホームステイ高校生との交流会	17	グロ、ECF
6月28日		グローバル化のためのSDGs 勉強会（第1回）	32	グロ
6月29日		リトアニア勉強会	18	グロ
7月3日		海外渡航時の危機管理オリエンテーション	94	グロ
7月3日		杉原千畝記念館見学会	17	グロ
7月4日		岐阜地域留学生交流推進協議会総会	28	岐留協
7月8日		モロッコ ラバト国際大学 学長表敬訪問	14	グロ
7月10日		サマースクール（派遣）事前研修（第3回）	26	グロ
7月10日		能楽ワークショップ	35	グロ（日文）
7月11日		CVMP キックオフミーティング	17	グロ
7月11日	12月	CVMP	17	グロ
7月17日		サマースクール（派遣）事前研修（第4回）	35	グロ
7月17日		タイ シーナカリンウィロート大学 学長表敬訪問	20	グロ
7月18日		GU-GLOCAL シンポジウム	264	グロ
7月19日	7月22日	吉田学長・古田岐阜県知事 ウズベキスタン訪問	4	岐阜県
7月26日		グローバル化のためのSDGs 勉強会（第2回）	25	グロ
7月26日		リトアニア高校生来訪（総合文化祭）	50	岐阜県
8月4日		日本語・日本文化研修留学生修了論文発表会	43	グロ（日文）
8月9日	9月6日	カリフォルニア大学デービス校 EST プログラム（アメリカ）	3	グロ
8月27日	9月29日	グリフィス大学 ESL プログラム（オーストラリア）	30	グロ
8月28日		「北東インドの多様性と平和を考える -Remembering in peace」	23	笹川平和財団
8月31日	9月29日	アルバータ大学 ESL プログラム（カナダ）	23	グロ
9月4日	9月10日	吉田学長 フランス（リール大学）、リトアニア（VNU）訪問	7	グロ
9月4日	9月10日	小山機構長 国際会議参加（於：インドグワハティ）（学長代理）	1	JSPS
9月9日		全国大学 JDP 協議会幹事会	105	グロ



開始	終了	名称	参加人数	主催
9月27日		グローバル化のためのSDGs勉強会（第3回）	22	グロ
10月15日		全国大学JDP協議会 総会	105	グロ
10月19日		第3回日印大学等フォーラム@インド・デリー	2	JST
10月21日		インド工科大学ハイデラバード校主催JAPAN ACADEMIC DAY	4	IITH
10月17日		カウナス工科大学「ネムナス」来学	44	岐阜県
10月18日		アンダラス大学 学長表敬訪問	9	グロ
10月18日		リトアニアNOW2024オープニングイベント	6	岐阜県
10月29日		駐日リトアニア大使 特別講演会（リトアニアNOW一環）	220	グロ
10月30日		岐阜地区ワークショップ	29	グロ
11月4日		敦賀ムゼウム見学実習	19	グロ
11月8日		モンゴル生命科学大学副学長表敬訪問	8	グロ
11月5日	11月18日	ポッドキャスト配信：GU-GLOCAL シンポジウム（R6.7.18開催）	－	グロ
11月6日		IC-GU12ラウンドテーブルミーティング2024	25	連農
11月7日		UGSAS-GU Poster Presentation on Agricultural Sciences 2024	50	連農
11月6日	11月7日	10th ICC in Gifu University	203	連農
11月10日		国際交流会館ウェルカムパーティ秋	31	グロ
11月13日		茂木健一郎先生と考える脳とAIのアライメント	50	グロ
11月20日		海外留学フェア2024秋	35	グロ
11月22日		グローバル化のためのSDGs勉強会（第4回）	33	グロ
11月28日		リトアニア勉強会）リトアニアのビール文化：伝統と革新	25	グロ
11月30日		外国人留学生日本語弁論大会	約50	岐留協
12月2日		在名古屋米国領事館首席領事 学長表敬訪問、学生との交流会	7	グロ
12月3日		臨沂大学（Linyi University）訪問団 副学長表敬訪問	8	工学
12月6日	12月18日	JDP シンポジウム（12/6メインシンポ、産官学金連携セッション）12/18学術セッション（GILPシンポ）	119/95/	東海機構 / グロ /GILP
12月5日	12月20日	Winter School	8	グロ
12月9日		リトアニア勉強会）リトアニアの冬の行事	18	グロ
12月11日		十二単の着装と体験	53	グロ（日文）
12月12日		CVMP2025ファイナルコンペティション	37	グロ
12月18日		JDP シンポジウム 学術セッション（Session 1）	79	グロ
12月20日		駐日インド大使 学長表敬、インド人留学生等交流	28	グロ
12月25日		JDP シンポジウム 学術セッション（Session 2）	40	グロ
1月24日		C2-FRONTES 第二回国際連携推進連絡会	29	グロ
1月29日		VMU 学長表敬／リトアニア講演会	29	グロ
1月30日		国際協働推進部門セミナー「グローバルな背景が創る新しい価値とヒトを動かす仕掛けづくりとは	160	グロ
2月21日		グローバル化のためのSDGs勉強会（第6回）	25	グロ
3月3日	3月15日	Spring School Program	12	グロ
3月3日	3月5日	グワハティシンポジウム	154	グロ /ITG
3月27日		タイ シーナカリンウィロート大学 学長表敬訪問	41	グロ
3月28日		ザンビア大学 学長表敬訪問	10	グロ
合計		81 件		

※参加人数について、来訪の場合は来訪者人数

4. 大学間学術交流協定先との交流状況

種 別			教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入
アメリカ	サンディエゴ州立 大学	2022	2	0	2	0
		2023	1	0	1	0
		2024	0	0	0	0
	ノーザンケンタッキー 大学	2022	1	1	13	1
		2023	1	1	10	4
		2024	1	0	7	6
	ユタ州立大学	2022	0	0	0	0
		2023	2	0	0	0
		2024	0	0	1	0
	ユタ大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	1	0
		2024	0	0	0	0
	南フロリダ大学	2022	3	0	2	0
		2023	13	1	3	0
		2024	7	4	4	47
	小 計		31	7	44	58
インド	アッサム大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	1	0	0
	インド工科大学 グワハティ校	2022	25	10	13	14
		2023	19	5	18	0
		2024	19	4	15	19
	小 計		63	20	46	33
インドネシア	アンダラス大学	2022	0	1	0	0
		2023	0	1	0	0
		2024	1	4	0	1
	ガジャマダ大学	2022	1	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	2	1	2	2
	スプラス・マレット 大学	2022	0	0	0	0
		2023	2	3	0	0
		2024	0	4	0	2
	バンドン工科大学	2022	0	0	0	0
		2023	1	0	4	0
		2024	2	0	4	4
	ブラヴィジャヤ大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	ボゴール農科大学	2022	0	4	0	0
		2023	0	1	0	0
		2024	2	2	5	1
	ランボン大学	2022	0	1	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	2	0	0	0
	小 計		13	22	15	10

種 別			教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入
エジプト	ベンハー大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	2
		2024	0	0	0	1
	小 計		0	0	0	3
オーストラリア	グリフィス大学	2022	5	0	33	0
		2023	2	0	36	0
		2024	3	0	31	0
	シドニー工科大学	2022	0	0	3	0
		2023	0	0	1	0
		2024	1	0	3	0
	小 計		11	0	107	0
カナダ	アルバータ大学	2022	3	0	6	0
		2023	2	0	14	0
		2024	2	0	32	0
	マギル大学	2022	0	0	0	0
		2023	4	0	0	0
		2024	1	1	0	0
	レイクヘッド大学	2022	0	0	1	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	小 計		12	1	53	0
韓国	高麗大学校	2022	0	0	1	0
		2023	0	0	0	0
		2024	1	0	0	0
	ソウル科学技術 大学校	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	2
		2024	0	0	0	3
	木浦大学校	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	1
		2024	0	0	0	0
	小 計		1	0	1	6
スペイン	サラマンカ大学	2022	0	0	0	1
		2023	0	0	0	1
		2024	0	0	0	2
	小 計		0	0	0	4
タイ	カセサート大学	2022	1	0	0	1
		2023	1	1	0	2
		2024	1	0	0	4
	チェンマイ大学	2022	0	0	1	0
		2023	0	0	5	0
		2024	0	0	2	0
	キングモンクット 工科大学トンブリ校	2022	1	0	0	0
		2023	0	1	1	0
		2024	2	0	2	0
	シーナカリンウィ ロート	2022	—	—	—	—
		2023	—	—	—	—
		2024	0	19	0	0
	小 計		6	21	11	7



種 別			教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入
中国	内蒙古師範大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	2
		2024	0	0	0	1
	内蒙古大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	内蒙古農業大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	華僑大学	2022	0	0	0	2
		2023	0	0	0	3
		2024	0	0	0	3
	吉林大学	2022	0	0	0	1
		2023	0	0	0	1
		2024	0	0	0	0
	広西大学	2022	0	0	0	1
		2023	0	0	0	5
		2024	0	0	0	5
	江南大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	2
		2024	0	0	0	2
	浙江大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	電子科技大学	2022	0	0	0	2
		2023	0	0	0	3
		2024	0	0	0	2
	同済大学	2022	2	0	0	0
		2023	0	0	1	0
		2024	1	0	0	0
	小 計		3	0	1	35
ドイツ	エルフルト大学	2022	0	0	2	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	バイロイト大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	1	0	2	0
	小 計		1	0	4	0
ハンガリー	パンノン大学	2022	0	0	0	0
		2023	1	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	小 計		1	0	0	0
バングラデシュ	ダッカ大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	2	0	0
		2024	0	0	0	0
	バングラデシュ農業大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	1	1	0	0
	小 計		1	3	0	0

種 別			教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入
フィリピン	マリアノ・マルコス 州立大学	2022	5	0	0	0
		2023	0	8	0	0
		2024	0	0	1	0
	小 計		5	8	1	0
ブラジル	カンピーナス大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	小 計		0	0	0	0
フランス	パリ・サクレ大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	1	1
	リール大学	2022	2	1	0	4
		2023	8	7	1	4
		2024	10	4	0	3
	小 計		20	12	2	12
	ベトナム	ハノイ工科大学	2022	1	0	0
2023			1	1	0	0
2024			2	0	0	2
フエ大学		2022	0	0	0	1
		2023	7	0	10	1
		2024	2	0	6	1
小 計		13	1	16	5	
マレーシア	マレーシア国民大学	2022	17	0	3	4
		2023	5	8	4	2
		2024	2	1	1	4
	小 計		24	9	8	10
モロッコ	ラバト国際大学	2022	－	－	－	－
		2023	－	－	－	－
		2024	2	7	0	0
	小 計		2	7	0	0
リトアニア	ヴィータウタス・マ グナス大学	2022	12	3	0	0
		2023	1	2	2	0
		2024	5	2	0	0
	カウナス工科大学	2022	0	0	0	0
		2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
	小 計		18	7	2	0
	合 計		2022	81	21	80
2023			71	42	112	35
2024			73	55	119	116
総 計			225	118	311	174

5. 海外オフィス・研究施設

●岐阜大学海外オフィス

設置場所	国・地域	設置時期
岐阜大学上海オフィス	中国	2009年5月
岐阜大学ダッカ大学内オフィス	バングラデシュ	2009年8月
岐阜大学スプラス・マレット大学オフィス	インドネシア	2014年12月
岐阜大学広西大学内オフィス	中国	2015年3月

●共同研究施設

設置場所	国・地域	設置部門	設置時期
ボゴール農科大学	インドネシア	天然物化学	2014年12月
スプラス・マレット大学	インドネシア	環境科学	2014年12月
ダッカ大学	バングラデシュ	生化学	2015年10月
カセサート大学	タイ	微生物学	2016年2月
アンダラス大学	インドネシア	ポストハーベスト工学	2016年11月
キングモンクット工科大学トンブリ校	タイ	ポストハーベスト工学	2017年9月

6. 国際共同研究等の採択実績

●（公財）田口福寿会国際学術交流助成金採択一覧

公益財団法人田口福寿会助成事業の助成金により、本学と学術交流協定を締結している外国の大学との交流を促進し、教育・研究の向上を図るため、協定大学との共同研究を行う者に対して助成を行った。令和2年度以前は、海外派遣・招へいに係る旅費助成を行っていたが、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により派遣・招へいが困難となったことを受け、令和3年度以降は、渡航を伴わない共同研究に対しても支援を行うものとし、外国旅費のほか、論文投稿費（英文校正費含む）、オンラインミーティングのライセンス取得に係る費用、消耗品費に対する助成を行ったが、令和6年度より、海外研修を行う者へ海外渡航への支援を再開した。

区分	採択者	学術交流先	研究課題	派遣・招へい期間
派遣	工学部 深井 英和 (准教授)	東ティモール国立大学工学部 (東ティモール)	ICTと深層学習の社会インフラや農業への応用	2024年9月20日 ～ 2024年9月29日 (10日間)
	応用生物科学部 中川 香澄 (助教)	広西大学 (中国)	肝臓疾患診断支援（CAD）システムの開発と利用に関する研究	2024年7月30日 ～ 2024年8月22日 (24日間)
	高等研究院 航空宇宙生産技術開発 センター 尾関 智恵 (准教授)	キングモンクット工科大学ト ンブリ校 (タイ)	バナナのクラウン腐敗病を防除する微生物の探索	2024年7月3日 ～ 2024年7月19日 (17日間)
招へい	工学部 原 武史 (教授)	慶北大学 (韓国)	電気めっき法で作製したFe-Niめっき層の軟磁性に関する研究	2024年8月19日 ～ 2024年8月30日 (12日間)
	工学部 尹 己烈 (准教授)	ヴィータウタス・マグヌス大 学 (リトアニア)	岐阜大学 全学共通科目「異文化論（リトアニア学）」「ロボット文化論」 質向上のための調査および岐阜・リトアニアの共同研究の推進	2024年9月6日 ～ 2024年9月12日 (7日間)



7. 留学生の地域貢献

●留学生の地域イベント等への派遣実績

件数	日時	事業名	主催者	参加人数
1	2024年5月～ 2025年3月(週1回)	ECF(イングリッシュ・コミュニケーション・フレンド)	北方町教育委員会	4
2	2024年6月～1年	ベトナム語の通訳・翻訳(アルバイト)	一宮市役所観光交流課 (一宮市国際交流協会 iia)	1
3	2024年6月1日	ぎふ清流座 ハワイ大学地歌舞伎特別公演	(公財)岐阜県教育文化財団	14
4	2024年6月21日	鶴飼交流会	国際ソロプチミスト岐阜	18
5	2024年7月6日	多文化共生フォーラム～各国の「違い」を尊重して共に生きる社会とは?～世界の文化遺産～	岐阜県世界青年友の会	3
6	2024年8月18日～ 2024年8月24日	夏休みホームステイ	一宮市国際交流協会 iia	3
7	2024年8月19日～ 2024年9月13日	オンライン日本語講座(OPJLC)	東京外国語大学	9
8	2024年9月18日	中学生との国際交流会	岐阜大学教育学部附属小中学校	5
9	2024年10月10日	中学生との国際交流会	岐阜大学教育学部附属小中学校	3
10	2024年10月19日	第63回 外国人による日本語弁論大会	一般財団法人 国際教育振興会、国際交流基金、小田原市	1
11	2024年11月9日	中間研究発表会	岐阜市立長良西小学校	9
12	2024年11月15日	第412回市民の劇場 松竹大歌舞伎	岐阜市民会館、公益財団法人 岐阜市国際交流協会	38
13	2024年11月24日	ホームビジット	岐阜市国際交流協会	14
14	2024年12月17日	岐阜市エンジョイツアー	岐阜大学教育学部附属小中学校	2
15	2024年12月18日	クリスマスプレゼント会	国際ソロプチミスト岐阜	40
16	2025年1月29日	国際理解講座 ～「岐阜大学留学生招へい」交流事業～	岐阜県世界青年友の会 (大垣市立日新小学校)	5

8. 令和 6 年度における各種広報資材

●国際協働教育推進関連

(1) 岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2024

6 回目となるジョイント・ディグリーシンポジウムはオンライン及び一部対面で開催。

岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2024
メインシンポジウム フライヤー (A4, 1P)

岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2024
産官学金連携セッション フライヤー (A4, 1P)



岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2024
ブース展示 フライヤー (A4, 1P)



(2) GILP Symposium

JDP の学生が企画・運営し、IITG との共催により開催したサテライトシンポジウム。

GILP Symposium 2024 Summer
フライヤー (A4, 1P)



GILP Symposium 2024 Winter
フライヤー (A4, 1P)



(3) Collaborative Video Making Program (CVMP)

令和2年度より開催しているオンラインによるジョイント・ディグリー協定校間学生交流プログラム。

CVMP 2024 学生募集用フライヤー (A4, 2P)
日英で作成。



CVMP 2024 Final Competition フライヤー (A4, 1P)
日英で作成。



(4) ウィンタースクール

平成27年度から開催している JD 協定校の IITG 及び UKM からの留学生招へいプログラム。

ウィンタースクール2024 フライヤー (A4, 1P)



(5) スプリングスクールプログラム

平成30年度から開催している JD 協定校の IITG への学生派遣プログラム

スプリングスクールプログラム2025 フライヤー (A4, 1P)



(6) ウィンタースクール報告書 (A4,10P)

令和6年度ウィンタースクールの活動報告書を作成した。



Overview of the 8th Winter School

Objectives:

In April 2018, Gifu University launched International Joint Degree Programs (JDP) with both the Indian Institute of Technology, Guwahati (IITG) and Universiti Kebangsaan Malaysia (UKM). The Winter School is designed to provide an opportunity for students from these institutions who are considering graduate studies that would provide them with a closer relationship with Gifu University and Japan. The theme of this year's Winter School is Studying Science of Japanese Food. Students from the two universities (participants) visited Japanese companies, interacted with Japanese students, engaged in research activities, and experienced Japanese culture. Gifu University hopes that the participants will serve as bridges between IITG/UKM and Gifu University, and play an active role in fostering mutual understanding for years to come.

Number of Participants:

6 students from IITG (3 male and 3 female; 2 undergraduate students and 4 master's degree students)
2 students from UKM (2 male; 2 master's degree students)

Contents:

- Opening Ceremony
- Gathering with Gifu University Students
- Joint Degree Symposium and Booth Exhibition
- Laboratory Experience
- Japanese Cultural Experience (Jani-Hibi)
- Collaborative Video Making Program Final Competition
- Off-Campus Lecture in Yachiu Town
- Tokyo Excursion
- Gathering with High School Students from Gifu City
- Accomplishment Reports and Closing Ceremony



Opening Ceremony

December 5 (Thu.)

The opening ceremony was held in the University Library Meeting Room. After an opening speech by Dr. Lim Lee Wah, Vice President (Global Outreach, Diversity, Gender and Library) of Gifu University, the participants introduced themselves and enjoyed communicating with other participants, professors, and student tutors.



Gifu Park Tour

December 5 (Thu.)

The participants visited Gifu Park and Gifu City Museum of History. First, the participants visited Gifu Park before strolling through the old streets of Kawarimachi, the Japan-China Friendship Garden, and the grounds of Gifu Gokoku Shrine. Lastly, they visited the museum to learn about the History of Gifu City.



Gathering with Gifu University Students

December 5 (Thu.)

A gathering with Gifu University students was held in the University Library Meeting Room. The participants met some JDP students, Spring School Program 2024 participants, Collaborative Video Making Program (CVMP) 2024 participants, and student tutors and enjoyed talking with everybody.

The Spring School Program and CVMP are exchange activities for Gifu University, IITG and UKM students. This gathering helped all participants get to know each other.



Joint Degree Symposium and Booth Exhibition

December 6 (Fri.)

The Joint Degree Symposium 2024 themed Challenging to Promote Multicultural Coexistence Through Globalization was held at the Institute for Glyco-core Research (GGORE) on campus with a Zoom Webinar. The participants joined the symposium with English subtitle on the screen. After the symposium, they visited the Booth Exhibition related to the JD Symposium. They explored the booths and asked questions.



December 16 (Wed.)

The Joint Degree Symposium 2024 academic session discussing a Global Lecture Series on Science, Technology and Engineering hosted by GLP was held in the form of a Zoom Meeting. The participants joined the meeting in the University Library Meeting Room. They put questions to the speakers and gained a deeper understanding of leading-edge science and technology across the world.



Laboratory Experience

December 9 (Mon.) and December 12 (Thu.)

This experience program was set up for the participants to learn more about *koji* (malted rice). In the first half of the Laboratory Experience, the participants visited the Instrumental Analysis Center on campus, where they received an explanation of the equipment and toured the center. In the second half, they were given an overview of *koji* and how to use a scanning electron microscopy (SEM) to observe its microstructure. Next, they carried out SEM observations. First, they coated the *koji* samples with osmium in order to observe them under the SEM, and then each participant experienced operating the SEM to observe *koji* at the atomic level.



December 10 (Tue.) and December 12 (Thu.)

This experience program was set up for the participants to learn more about the Japanese food and science. In the first part of the Laboratory Experience, the participants visited the Gifu Prefecture Research Institute for Food Sciences on campus, attended a lecture on the overview of *koji*, and took a laboratory tour. In the second part, the participants made *koji* and tasted Amazake (sweet sake, non-alcoholic). Also, the participants made and tasted *konyaku* under the guidance of a *konyaku* company specialist.



Japanese Classes

December 9 (Mon.) and December 10 (Tue.)

Japanese language lessons were offered to the participants by the Center for Japanese Language and Culture. They learned basic Japanese language over a total of five hours of lessons.



Japanese Culture Experience (Juni-Hito)

December 11 (Wed.)

Japanese Culture Experience (Juni-Hito, twelve-layered kimono) was held in a washitsu (Japanese style room) in the Center for Japanese Language and Culture (CJLC).

The participants took part in the event with international students studying on the Japanese Language and Culture Studies Course, and on the Japanese Society and Culture Program at C.J.C., and other international and Japanese students, faculty and staff members of Gifu University.

They enjoyed this beautiful traditional Japanese culture. The first part of the event was a lecture about the history and basic knowledge of Juni-Hito. In the second part, the instructors dressed a student selected from among the volunteers to be the dressing model for Juni-Hito and answered questions from the participants. Finally, those who wished to participate entered the space created inside a Juni-Hito after the wearer had slipped out of it whilst preserving its shape. They felt its weight and enjoyed taking pictures with their friends.



Collaborative Video Making Program Final Competition

December 12 (Thu.)

The Collaborative Video Making Program (CVMP) 2024 Final Competition was held in a hybrid format via Zoom Webinar and at the presentation area on the first floor of the OHS Gifu University Plaza on campus. The participants attended at the Plaza. In the CVMP, the students from IITG, UKM, and Gifu University were divided into 4 groups to each shoot a video under the theme of Thinking About SDGs under the instruction of a creative agency producer in Australia. In the Final Competition, the videos of all the groups were broadcast, each group presenting their own. After that, the viewers and special judges voted to determine the best video. The participants enjoyed watching all the videos; a powerful representation of the collaboration of the students of the three universities.



Off-Campus Lecture in Yaotsu Town

December 13 (Fri.)

This Off-Campus Lecture was set up for the participants to learn more about traditional Japanese food. The participants visited Iwade's Tea Plantation, Yaotsu Town (Gifu). They experienced Japanese tea blending and took a tea plantation tour. They also tasted some vinegar samples that the Uchibori vinegar brewery in Yaotsu Town kindly provided.



Tokyo Excursion

December 16 (Mon.) – December 17 (Tue.)

This excursion was organized to provide the participants with a deeper understanding of Japanese industries and companies. Prior to the excursion, the participants attended a special lecture on Japanese industry and corporate culture on December 11 (Wed.). During the Tokyo excursion, the participants had the opportunity to visit prominent research institutes, companies, and a government organization. The itinerary included tours of the Japan Fine Ceramics Center (Jfccc), JICA Headquarters (Tokyo), Yamazaki Baking Co., Ltd. (Chiba), and Nihon Nohyaku Co., Ltd. (Tokyo).



Gathering with High School Students from Gifu City

December 19 (Thu.)

A gathering with Kano High School students was held in the General Education Building on campus. The participants and 40 high school students made 5 groups for group discussions. In the first part of the event, they had a lecture about Global initiatives of Gifu University from Dr. ESHARA Aiko, Associate Director of the Organization for Promotion of Globalization of Gifu University. In the second part, they had a brief lecture about UKM and the study abroad experiences of JGP students from UKM. Finally, the high school students gave presentations, after which, all students enjoyed talking with each other. This gathering helped all participants get to know each other and learn about cultural differences.



Accomplishment Reports and Closing Ceremony

December 20 (Fri.)

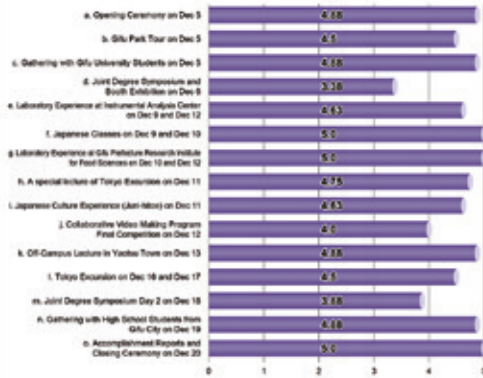
On the final day of the Winter School 2024, the Accomplishment Reports session was held in the Learning Commons, General Education Building on campus. Dr. YOSHIDA Kazuhisa, President of Gifu University, some professors and some students joined this session. The participants gave poster presentations about the activities in the Winter School. In just two weeks of school activities, the participants had made a lot of progress and displayed confidence in their achievements. President Yoshida gave small gifts to the top four students. At the Closing Ceremony, Dr. Lim awarded the Certificate of Completion to each participant. The participants, professors and students had a hard time saying goodbye to one another, and they all hope to meet again. The 8th Winter School Program marked another successful milestone in the history of Winter School Programs.





Questionnaire to participants of Winter School 2024

1. Satisfaction with the 8th Winter School



2. Comments from Participants

● "Winter School 2024 at Gifu University is an extraordinary opportunity that offers so much more than academic enrichment. From my perspective, this program is a perfect blend of learning, cultural exploration, and personal growth. The interactive workshops, insightful lectures, and hands-on sessions provide a deep dive into cutting-edge topics, all while being guided by some of the best experts in their fields. What makes this experience truly special is the chance to connect with participants from diverse backgrounds, creating a dynamic environment for exchanging ideas and building global networks. Gifu University, with its state-of-the-art facilities and welcoming atmosphere, serves as the perfect setting for such an impactful program. In addition to the academic offerings, exploring the beautiful city of Gifu and its surrounding areas adds an unforgettable cultural dimension to the program. From traditional Japanese experiences to breathtaking natural landscapes, it's a journey that enriches both the mind and the soul. Winter School 2024 is not just a program, it's an opportunity to challenge myself, learn from others, and create lasting memories in one of the most inspiring settings imaginable. From my perspective, it's a once-in-a-lifetime experience that I'd highly recommend to anyone looking to grow academically, culturally, and personally."

● "Great experience, I will definitely come to Japan again, possibly for a job or higher studies."

● "It was a great opportunity for me to learn about different culture and was amazed to see the waste management system of Japan."

8



●地域国際化推進関連

(1) 令和6年度 グローカル化のためのSDGs勉強会 (計5回)

学生・教職員・地域企業を対象とした地域社会の国際化に向けたSDGs勉強会を実施。

令和6年度 グローカル化のためのSDGs勉強会
フライヤー (A4, 1P)



(2) Meet up CHUBU

「地域・産業界の国際連携」活動の一環として、中部経済産業局及び中部経済連合会との連携企画「Meet up Chubu vol.39」を開催。

Meet Up CHUBU vol.39 フライヤー (A4, 1P)



(3) 北東インドの多様性と平和を考える

—Remembering in Peace—

笹川平和財団主催、岐阜大学共催により開催。

北東インドの多様性と平和を考える

—Remembering in Peace— (A4, 1P)



●留学促進関連

(1) 海外留学フェア

本学学生に向けた、グローバル推進機構主催を始めとした各種留学プログラムを紹介するイベントを年2回実施。

海外留学フェア2024春 フライヤー (A4, 1P)



海外留学フェア2024秋 フライヤー (A4, 1P)



(2) サマースクール(派遣)説明会

夏休みに開催される海外協定大学への留学プログラムに関する説明会。

2024年度サマースクール(派遣)説明会
フライヤー (A4, 1P)



(3) 春の短期英語研修プログラム募集用フライヤー

春休みに開催される海外協定大学への留学プログラムに関する募集。

カナダ アルバータ大学 春の短期英語研修プログラム
フライヤー (A4, 1P)



(4) サマースクール（受入）

日本語レベル 初級から N3 レベルの協定大学学生に向けた受入プログラム。

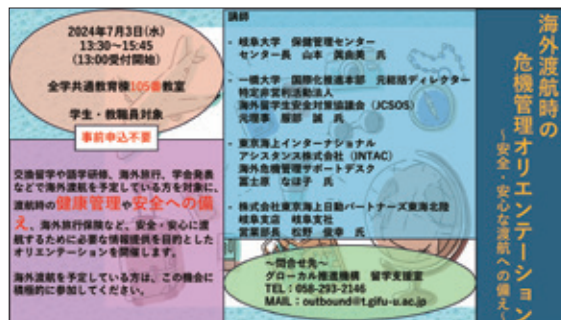
2024年度岐阜大学サマースクール
フライヤー（A4, 1P）



(5) 海外渡航時の危機管理オリエンテーション

留学や海外旅行を予定している学生・教職員などを対象とし、幅広く危機管理意識を醸成することを目的として開催しているイベント。

海外渡航危機管理オリエンテーション
フライヤー（A4, 1P）



(6) study abroad

本学学生に向けた留学ガイドブックを発行。留学に必要な手続きや協定大学の情報等が掲載されており、本学HP上でも公開している。

study abroad 岐阜大学 留学ガイドブック2024（A4, 32P）





●国際企画関連

(1) NEWS Letter

年2回発行している対外的な広報フライヤー。令和6年度は57号(10月)と58号(3月)を日英でそれぞれ発行。新入生へも配付している。

NEWS Letter 2024 October 57 (A 4, 4 P) 日英で作成

NEWS Letter 2025 March 58 (A 4, 4 P) 日英で作成



(2) GU-GLOCAL シンポジウム2024

インドへの進出支援や現地市場調査では国内第一人者である繁田奈歩氏、ニューヨークと東京を拠点に企業のブランディングを手がけるレイ イナモト氏、脳科学者の茂木健一郎客員教授、吉田和弘学長による GU-GLOCAL シンポジウム「世界に翼を広げたら」を実施。

GU-GLOCAL シンポジウム2024フライヤー (A 4, 2 P)



(3) カウナス工科大学との学生交流会

学術交流協定大学であるリトアニアのカウナス工科大学学生らによるフォークダンスグループ「ネムナス」との学生交流会を開催。

カウナス工科大学との学生交流会 (A 4, 1 P)



(4) 駐日リトアニア大使 特別講演会

駐日リトアニア共和国 特命全権大使 オーレリウス・ジーカス大使による特別講演会を開催。

駐日リトアニア大使 特別講演会 (A 4, 1 P)



(5) 茂木健一郎先生と考える脳と AI のアライメント

岐阜大学人工知能研究推進センターおよび工学部電気電子・情報工学科情報コースと共催で「脳と AI のアライメント」をテーマに脳科学者の茂木健一郎先生による特別講演を開催。

茂木健一郎先生と考える脳と AI のアライメント
フライヤー (A 4, 1 P)



● 広報動画

(1) Glocal Lesson

「地球規模で考えながら地域の課題を解決する」グローバル人材の育成を目指す岐阜大学グローバル推進機構が配信・対面・リアルタイムで提供する学習プログラムを更新した。

会員登録はこちらから



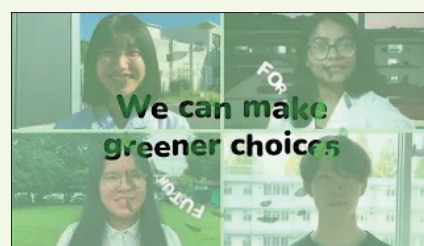
(2) Collaborative Video Making Program

Collaborative Video Making Program に参加した岐阜大学、インド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学の学生が協力して作成した、国際交流促進動画。英語で作成。(3 分)

Beat the Heat (Group 1)



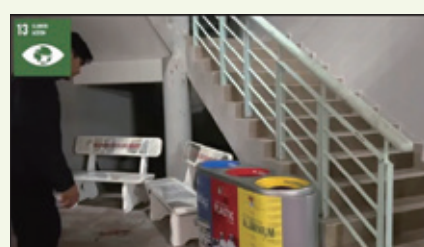
Youth of a Greener Tomorrow (Group 2)



Sunshine and Green Dreams -Our Journey Toward a Sustainable Planet- (Group 3)



Think environment, Make beautiful (Group 4)



編集後記

2024年度の「岐阜大学国際交流年報」をお届けできることを、大変うれしく思います。新型コロナウイルス感染症の影響により制限されていた国際交流活動も、ようやく本格的な再開を迎えました。本年度は、対面での交流や海外渡航が復活し、キャンパス内外に再び国際的な活気が戻ってきたことを、肌で感じる一年となりました。「Winter School Program 2024」では、インド工科大学グワハティ校およびマレーシア国民大学の学生が岐阜を訪れ、日本の食品科学や文化を体験しながら学びを深めました。また、「Collaborative Video Making Program 2024」では、3カ国の学生がSDGsをテーマに協働し、国境を越えた対話と創造を実現しました。その他SDGs勉強会やシンポジウムの開催など「グローバル」な連携も進み、大学と地域、そして世界との結びつきが一層強化されました。こうした取り組みは、岐阜大学が世界と地域をつなぐ中核的な役割を果たしていることを示すものです。これまでの努力と成果を記録するこの年報が、読者の皆様にとって、未来の国際交流の可能性を見つめる一助となれば幸いです。

最後になりますが、国際交流活動の実現と発展にご尽力いただいたすべての教職員、学生、地域・海外の関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。今後も岐阜大学の国際化が持続的に発展していくことを願い、筆を置かせていただきます。

2025年 6 月

編集担当
年報ワーキンググループ
工学部 久米徹二

岐阜大学グローバル推進機構 国際企画部門 年報ワーキンググループ

久米 徹二（工学部）
山川 路代（医学系研究科）
古田 知美（グローバル推進機構）
松井 真弓（グローバル推進機構）
グローバル推進機構国際総務室・留学支援室

岐阜大学国際交流年報2024

2025年 6 月 発行

編 集

岐阜大学グローバル推進機構

〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1
TEL：058-293-3351
E-mail：kokusaik@t.gifu-u.ac.jp
HP：https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/

印刷・製本 西濃印刷株式会社
〒500-8074 岐阜市七軒町15番地

